

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十八年一月二十五日 印刷
昭和四十八年二月一日 発行 (毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷五四九号



No. 549

二月号

姉妹品大和錦印



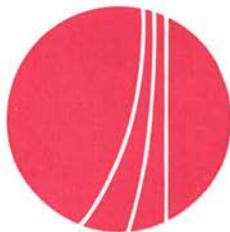
警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社
大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電話(779)1690~2番

川柳塔社同人の
胸にかがやく
シンボル・バッジ



一個五百円(桐箱入り)

送料本社負担

ご疎遠深謝必要な嘘である

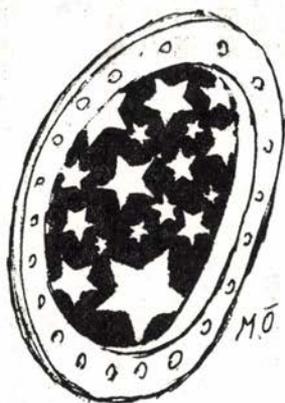
浦島太郎に似た忍者めく賀状

末孫の自慢箸紙の名が読める

賀状さかなに元旦の朝の酒

風邪抜けて書きぞめうれし墨の色

中島生々庵



有り難い正月

暮れからの疲れに風邪気味も手伝ったので、今年は例年の西大谷詣りを止めて、三日の午後大阪で両御堂に参拝した。昼さがりの北御堂の本堂は心ゆくまで静かですがすがしい。献香一礼して引き返そうとすると、私がつまずのを待ちかねたように香爐の前に、ふかふかと頭をさげる二人の青年がある。正月という改った姿ではない。街でよく見る徳利首セーターにジーンズである。広い本堂にはこの二青年と私の外に人影はない。私はこの沈思する敬虔な青年からほのかにゆらぐ光り

を感じ、その光りに私の体もすべてが晒された思いがした。聖なる善知識とはこんな姿を言うのではないだろうかと思えた程感激の瞬間であった。やがて二人は茫然としている私を氣にとめることもなく街に去って行った。たったこれだけの話である。一年前にはこの二人と同世代の若人が軽井沢であの騒ぎであった。一人一人が背負うている宿縁のきびしさから合掌を献げた。有り難い正月である。

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

(路郎)

私の句

借金はないが人情に借りができ

清水一保

川柳塔二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

有り難い正月

中島生々庵 (1)

つがるまんだん

工藤甲吉 (2)

川柳初篇研究 (百十五)

前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味丸

博美・藤井和雄
十府・岡田甫

「旅人」以後の麻生路郎作品

(21)

傍島静馬 (27)

師匠の貫録

東野大八 (24)

川柳塔 (同人作品)

西尾菜選 (4)

水煙抄

菊沢小松園選 (30)

一分間の柳論

谷垣史好 (40)

秀句鑑賞 (同人吟)

橋高薫風 (26)

秀句鑑賞 (水煙抄)

若本多久志 (38)

川柳年鑑ぶっちゃけ噺

池口吞歩 (40)

つがるまんだん

工藤甲吉

太郎を眠らせ 太郎の屋根に 雪ふりつむ
次郎を眠らせ 次郎の屋根に 雪ふりつむ

三好達治の詩「雪」は、いかにも平和であるが、しかし、北のはて「津軽」の雪は、この詩の雪とは、まさに雪泥のちがいである。とりわけ二月は冬の絶頂。

天も地も人も消されて吹雪する

で、巨大な悪魔が天地をゆさぶり、その咆哮とも聞えるものすごい唸りは太郎、次郎を眠らせるどころか逆にたたき起こしてしまう。

そんな季節、津軽の炉辺では憂き晴らしに「津軽ゴタク」が語り合われる。ゴタクとは江戸小ばなしの「津軽版」だが、ゴタクをならべる前には、まず津軽の言葉の解説が要る。日本語が時々まじるかの如し

これは、先年、青森における生々庵主幹の名吟であるが、ここに将にそのもの

どサゆサと日の暮れ方をすれちがいでという拙吟を素材に少しくのべてみる。

川柳中山道六十九次……(1)

富士野鞍馬……

(28)

麻生葎乃……

(39)

近詠……

諸家

(21)

路郎選「真珠句抄」私感……

不二田一三夫

(42)

本社句会ベストテン……

谷垣史夫

(49)

古方句集自序……

戸田古方

(54)

きのう・きょう

本多柳志

(54)

一分間の私論……

兒島与呂志

(51)

私のメモ

吉田水車

(63)

雅号ぶっちゃけばなし

岩本雀彌子

(52)

初歩教室

本田恵二朗

(48)

大萬川柳「一回」

川村好郎選

(50)

柳界展望

(新之助)

(52)

本社一月句会

(庸佑)

(55)

各地柳壇

(文秋)

(59)

編集後記

吉原紅月選

(46)

一路集

安平次弘道選

(47)

「肩凝り」

小谷仙山選

(46)

「アロパン」

(一三夫・葉子)

(65)

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

(路郎)

私の句

お帰りと迎える妻がいて足りる

奥谷弘朗

「どサ」「ゆサ」！津軽の言葉を知らない

人には???である。ましてこれが立派なあ

いさつとして通用すると聞いてはますますわ

からなくなるだろう。これは「どこへ行くん

だい?」「銭湯へ行くんだ」ということなの

だが、たったこの二字の中にこめられたこの

二人の会話には、標準語では、言い現わすこ

とのできないニュアンスがあり、そして親愛

の情がこめられているのである。もっと裏を

探れば「そうか、お風呂へ行けるなら平和で

つつがない一日を暮らしたな」というのどか

な和が、たったこの二字にこめられているの

だ。

全く唾の言葉としておしだまって日蔭もの

としてようよう恥かしそうに語られてきた

(秋田雨雀)「津軽の言葉」つまり「津軽弁」

の味、ユーモアは、幅も奥行きも深くとても

標準語では尽くし切れないものがある。

そして「津軽弁」で語られるユーモラスな

小ばなしには、民衆が圧政時代にうちひしが

れ、みじめな生活を送っていた時代のあきら

めと、涙を伴うものさえ感じられるのだ。

ところで、私の念願するもの、それはこの

「津軽弁」を母とした「津軽川柳」の育成

であるが、私の力では到底およびそうもな

い。

川柳塔

西尾 栞選

神戸市 小浜 牧人

おでん屋の隅で孤独を温める

単調なりズム怠惰に明け暮れる

挿えてみれば小さな欲だった

未来図へ明るい色を挿って塗り

蛇口から水が漏れてる十二月

キリストの星を菓子屋で買う聖夜

岡山県 浜田 久米雄

聞かぬ振りするじいちゃんのよいところ

言い足りぬところは妻が口を出し

わかっている顔で新語を聞き流し

離婚したわけをくどくど聞きたがり

元旦の計そのままに二月の灯

どこをどう戻って来たは過去のこと

高槻市 若柳 潮花

きり炭の匂いも久し故郷の秋

かすらでもよし初春の日本髪

冷えてゆく愛を唇しっている

舞踊会より

花道は狐六法の灯がはいり

安土城跡より観音正寺へ

落城の火の手を思う風の音

山茶花の白が札所を秋にする

青森市 工藤 甲吉

大國で畳一丁だけもらい

空涙良寛さまはだまされる

盗まれるぐらいくちびる無くならず

南国へ出かせぎの列 雁の列

吹雪く日はいっそ昼から飲む話

倉敷市 水粉 千翁

はつ春(二句)

一歩ずつ平和が歩く丑の春

文化庁歌舞伎観賞(二句)

一力で国宝仁左衛門とぼけ

送られて送って昼の月が欠け

七彩の詩あり秋の吹き溜り

おもい出は海に向いてた月見草

尼崎市 黒川紫香

こけそうになって犬の仔よけて過ぎ

泣くところが無い大阪が捨て切れず

家三つ娘にわけて仮住居

忘年会よそ事にして夜勤に出

信楽の里

雄狸に交り雌狸寝てござる

松原市 谷垣史好

あたたかい握手その手で鶏を絞め

ブーツはく女おとこを御する気か

風雪に耐えて陛下の丸い背

腹芸へ何だか騙されたみたい

灯を消してさっき喧嘩をした夫婦

大阪市 天正千梢

暑さ寒さに我慢いらぬ世を嘆き

うかうかと情報洪水におぼれかけ

自由の重み知っているからまよい

処方箋のつもりみくじ引いてみる

「身欲じゃ」と弥陀はお耳ふさぎそう

門真市 福島鉄児

病院を抜け出しパチンコ屋で稼ぎ

明日を信じて今日の眼を閉じる

医者が殺したと遺族の涙

さて嫁くとなればやるのが惜しくなり

娘と歩るく足の運びがもう合わず

倉敷市 小幡里風

愛し乍ら別れ砂漠の胸となる

小細工をした欲望を見透かされ

辞退した椅子ヘライバル来て座り

有頂天にされて男の隙だらけ

浅い知恵或る日女の自己嫌悪

富田林市 浅川八郎

すきな酒雪の褥で安楽死

写経して心豊かに阿弥陀仏

体中打って害ねてはいつづけ

夢はよし歩いて二次会三次会

死んだ人の夢ばかり見る待ってね

倉敷市 松下梁水

涯しなきゴールへ駄馬として走り

屈辱に耐える日 日記復活す

生死一如己を悟す座禅組む

来年もつづくドラマの中に生き

馬鹿になる気を一言がまた過ぎる

岸和田市 高橋操子

招かざる客が恩師を取り囲み

ピーポーが耳についてる記者の妻

婦人記者身につまされる過去があり

養子三代に反せず孫も女の子

車まだ帰らず夜の願回事

神戸市 仲どんたく

大阪市 河野君子

軍歌聞く耳にも戦後派戦前派
ジャングルに生きて膚囚の教えまだ
山茶花の意地は野分きへ咲いて見せ
仏から風邪を貰った野辺送り
獣性を見せ血の色に爪を塗り

香川県 三井 酔夢

悪縁と思うはノラの血が流れ
おふくろに無理さロッキンロカビリー
遠い子の部屋を清めて師走冷え
あれやこれ地酒を給う冬の旅
尾瀬恋し夢の中なる水ばしよう

富田林市 岩田 美代

ゆっくりとはせ止めている迷い
冬雲のけわしき夜で小銭よむ
もう一押し誰かに押し欲しい背
行動に移せぬ倅が赤すぎで

七五三参り

玉砂利の一瞬華やぐ緋の歩み

富田林市 木村 弥栄子

学問で得たステップで踊れない
唯物論あわれすがれる神がない
クスかごへ丸めた愛が炎えている
失敗もない程なにもせぬ暮し
社会的動物だから仮面つけ

手乗りにする雛へ思案の十二月
耐えてゆく寡婦は女を捨てて生き
こんな時救われる夫の無関心
バネ効かぬまま新年へジャンプする
成人病センターで胃の検査する
胃カメラへ高まる鼓動の空しさよ

出雲市 尼 緑之助

肉牛のせつせと食べて荒い呼吸
連れさえあれば飲みたい霰
紫煙どこまでひろがる冬日和
日曜も勤める連れありニユールック
釣りだより師走の風がいらだたせ

倉敷市 本田 恵二郎

エアメールにたった五行を乗せてくる
叔母送る葬列長し冬近く
星屑と語るひととき若返り
ああしんど遂に本音がこぼれ出し
雨垂れへしはしとぎれた或る思索

鳥取市 河村 日満

大山にて(二句)

全山紅葉雲も見ているように浮き
六十五度で見上げる秋の山の色
舗装道路の雑草手抜き箇所なるか
菊活けて時雨つづきを書にひたり

赤い花も咲かせて砂丘生きている

岩国市

弘津柳慶

毛筆で調印式が無事終り

俺の子だ酔えばやっぱりくどくなり

用意した祝辞を前の人が言い

妻和裁娘は編機の十二月

死刑囚にしてはおいしい智恵を持ち

高槻市

福田丁路

革命を狙う若気の竹の槍

手っ取り早く金で面はり

スラスラと塗れぬペンキが癩の種

日溜りに遊ぶ雀のつぶらな目

杖を頼りに運命の皮肉をかこち

藤井寺市

西いわを

抱かれてる犬は喧嘩に弱いらし

変身もま近蛹は身振りする

若丹那ではなく先生と呼べ

萎びても赤その俣に唐辛子

息子を叱れば孫が僕を撲つ

宝塚市

傍島静馬

存らえて賀状書く友減る焦り

煤払い祖母仏壇にかかりきり

忘年会公認亭主の靴の音

また鮭かいうてた鮭に手が出せず

材木暴騰ホームプランを狂わせる

木曾路に旅して

薄雪の木曾路三段染の溪

峠越す雪が昔の道にする

新平家ブームで寺の柵が新ら

菊の鉢街道筋の駅静か

秋の絵の絵はがきばかり木曾の旅

島根県

堀江正朗

子のおふる貫って老いの背を伸ばし

見えぬから一步譲っているだけさ

盲人のまさかになれば荷に過ぎず

胃袋の中から柚の香がもどり

一喝が喉まで来てる苦笑い

兵庫県

河原みのる

下取りで値引きしたよにみせかける

日章旗あつた筈やが見当らず

法要の和尚はなべて煮豆ずき

戸籍名があと一度だけ要るのなり

死なはったげナ齡に不足はなかりける

宇部市

平田実男

光陰矢の如し月給日は遅し

当選のまたまた元の距離になり

下取りが効けばと思う齡になり

口応えする子等やるなとも思ひ

後輩結婚

泉佐野市 阿万万的

自由ちと束縛されるのが嬉れし

兵庫県 遠山可住

招かざる客が師走を話し込み

晩酌のそばでぎんなん焼きながら

かと言つて金の亡者にもなれず

くずさない線が僕にはきつすぎる

血縁という実印のむつかしさ

小松市 馬場魚山

毛糸編む手に引かかる世帯ずれ

牛小屋に牛と替つたコンパイン

初めてのポーナス急行券を買い

栄転をして栄転にある不安

聴く方が又かをつける空の事故

大阪市 有信新之助

灯を恋うて通えば寒い獣道

来し方を想えば骨が軋む夜

与える愛にひげを剃っている

ペンシルビルにも満月はまんまるい

夫婦箸片方ずつの夜である

大阪市 本多柳志

恍惚の人になるまじ詩を作り

仲人を待たせて足袋を履きかえる

断りに行けばこぶ茶でもてなされ

デパートへ婦唱夫随の歳暮展

疑わしきは皆高裁へもちこまれ

豊中市 戸田古方

喋るだけ喋べらしといてニッポン語

要領へそのうち妥協するらしく

ここまできても汝自身が見つからず

三十年間仇名をつけてもらえない

まだまだまだ頭でわかつただけのこと

八尾市 香川酔々

二学期も終わりチョークの粉払う

木枯しに背中押されて凡詩人

正月はくいで過ぐすと御用聞き

ニュースソース明かさぬ記者の正義感

地下街で庶民に見せる冬の虹

守口市 羽原静歩

菩提樹へ哭きに来る日の幼な妻

遣唐の昔は知らずマオタイ酒

倒産の毛布トコトンたたかれる

小豆島にて

モンキーランド人間様がたわいなし

ピンカール霧のベールを縫うて行く

倉敷市 野田素身郎

課長留守叱られ役が回ってき

残業宴会宴会残業十二月

妻子留守木枯やけに戸を叩く

永遠の別れかもしれんに男振りむかず

連れた子に信号無視をとがめられ

大阪市 正本水客

山峽を朝の光りがおりてくる

杉の天から飛瀑は音なき霧になる

ふだらくや白衣の判に杉が映え

熊野灘の日の出まともに湯があふれ

海中展望塔 海の魚に見詰められ

米子市 八木千代

返り花女の旅の足もとに

執念のようにサルビヤ咲き残り

抜くときは抜くさと一級ライセンス

血圧に逆らってまで孫へ編み

子と嫁の幸へちよっぴり妬ける日も

愛媛県 渡辺曉童

末娘容子結婚(三句)

巢立つ子反友哺の孝は思うまい

名付親伍健もみそなわせ給え

大阪の雨も風にも気をくばり

ないものほしさ げてものを買う

燃えつきたのはギャンブルの欲

倉吉市 奥谷弘朗

歩くのが性に合ってる小役人

切りかえも出来ず下積まだ続き

ふり出しにもどり二人になって老い

冗談の先手を掴んでいる話術

孫抱いて新居で迎えた屠蘇の味

竹原市 山内静水

肩書をとれば私は尋卒で

便利がられ重宝がられ椅子がない

股ポタン気づかぬこととは言いながら

捕えたねずみに因果 言いふくめ

有言実行ありがたがられ煙がられ

米子市 林瑞枝

老いて尚可憐なムード消えぬ女

娘を離し次の夢追うている若さ

目を伏せて花嫁母と手を重ね

お母さんと甘える所作も義理を越え

新婚の便りに酔うているこたつ

大阪市 川口弘生

牛乳で育ち垂乳根の愛に飢え

才能の涸渇はおひつをかするよう

先生という名で心の傷にふれ

余生まであと一周の当り歳

マイペースマイペースとて丑の春

大阪市 黒田真砂

手を伸ばせば届く心が捉めない

心に衣着せて女の素顔なし

女の城夢とあきらめ同居する

横むく術知らずまともに生きて居り

同窓会

ぼつぼつと友の計報をきく不安

大阪市 金井文秋

死ぬよりも中風が怖い太り過ぎ

稼ぎさえあれば愛情など要らず

エッチな話云うて叩かれご満悦

なぐさめで晴れる愚痴など知れたもの

一寸の虫にもなどと尺貫法が残り

京都市 都倉求芽

札束を上手くよむ方が借りる方

銀行のネオンだけ落ちついてる師走

香港行

象牙箸うまさも歯応え口応え

夜の明ける早さ22階に射す朝陽

三日目にへんな日本語感染ってた

京都市 松川杜的

自動巻も俺と一緒にの公休日

冬木立バックに塔を持つてくる

ペットコーナ九官鳥に「阿呆」と怒鳴られた

子供汽車国鉄なみの赤字線

悴せは濡椽へ散って来た紅葉

倉敷市 小野克枝

元日の玄関に射す陽に対す

丸々と肥った牛の不倅せ

成るようになる計算に念を入れ

売り買いの出来ぬ信用抱えている

満点に遠くも父は上におき

八尾市 高杉鬼遊

新年へ笑顔ひとつを用意する

母親の昔話しに夢育つ

義理という二字を背負うは妻ばかり

浮き雲は今どの辺りわがいのち

蹴られ石ころびの果の根をおろし

和歌山市 垂井葵水

純真さ迫り男の智恵惑う

満員の言い訳け車掌押されずに

しまったと思われている話し好き

古傷にソロソロ触れて来そうな瞳

出迎えの犬に落第報告す

堺市 河内天笑

その笑いノーコメントと云う如し

ひとまわり遅くなり母となる

その女もう挨拶も他人めき

風ふけば落葉は舞うてみたくなり

株高に関係のないやるせなさ

大阪市 児島与呂志

水冷えて水冷えてつるべで京の味

紅葉の深さに京の霜柱

金ためてためて女の業を知り

ごりよんさんのままで老いさせたい母

大阪の玄関歩道橋に立ち

西宮市 島居 百酒

紫の蒲団の恍惚たる温くも
百歳を生きて幸不幸の外に居り
好きな道歩んで受けた紫綬褒章
あの時の不覚が一生つきまとい
戦友会敬老会となる寿命

東大阪市 齊藤 三十四

能登一周の旅(二句)

能登大鼓耳を押えて感心し
伝統が此処にもあつた輪島塗り
だまされてあげるわ夫の嘘の下手
年寄りが好きとは嘘言うな
傷口をなめなめ日曜大工する

大阪市 大坂 形水

共産党ファンの社長と酒を飲み
礼状を出しそこなつたまま越年
そういえば年寄りボケか風邪引かぬ
何んとなく今年お事起こりそう
ゴルフでもどうかと思うゴルフ熱

大阪市 橘 高 薫 風

娘のボーイフレンドやよしお元日
昭和乱世今太閤は瘠せていず
かくし子が焼香をする左利き
人生に起承転結ありにけり(旅館廃業堂島を去る)
十二月しどろもどろの父となり

大阪市 不二田 一三夫

マンションという密室の演技派よ
母の顔と父の心を授けられ

飯田蝶子(七五)死去・昭四七・一一・二六

紫綬褒章勲四瑞宝章ブスの芸

寄席

テレビ病にみな冒かされてる芸人
売れすぎてわが身までも売っちゃまい

松江市 中川 晃 男

冷めたい川に伝統の藍染まる
姉さま人形紙の着物で泣けもせず
松江姉さまお城の歴史もう忘れ
立ちかけた客を時雨が引きとめる

大阪市 福井野 迷路

達筆もあわれ南座のまねき並み
階段の人生地下鉄ならずとも
敬老のそこまで問屋卸さない
すき焼で日本流のクリスマス

桜井市 岩本 雀 踊子

かなしみを綴る女の泣きぼくろ
病妻がかくも気にする他人様
過密都市他人の足にけつまずき
三山が今日も晴れてる盆地呆け

岡山県 直原 七面山

髪染めて同窓会へ急ぐ妻

人間対人間肩書などいらす

その口説へ乗ってやる気で飲むマダム
時間よ止まれ今仕合せの淵に居る

大阪市 山川 阿茶

高津の宮

たかきやにのぼらずとても煙けむり
親方の車で釣って来た女

団体のお詣り賽銭あげていず

これとこれ記憶の底にしずめとき

名古屋 吉田 水車

仕合わせは新春の挨拶申し上げ

消防車ピカピカとして今日も無事

ニッポンの音を八雲は下駄に聴き

伊志田孝三郎師追悼句会

紫の雲夢のつづきも安らかに

大阪市 西出 一栄

北風よ明治の背なは避けて吹け

とぼとぼと一九七二年をあるき終え

へそくりも甲斐性のうちにして励み

日めくりへ老の溜息大きこと

宇部市 石川 侃流洞

テレビ見る位置へコタツの指定席

嫁姑コタツが温い深夜劇

型だけにする結納の派手な熨斗

特製のように女房風邪引かす

伊丹市 小川 静観堂

死ぬなんて口にするもんやおまへんで
もう一度砂丘とんでみたし風紋を

六十年前の小川医学士

先生に招ばれ八千代はんにもお辞儀した
鏡の顔ほんまの顔にすこし似て

姫路市 梅谿庵 不醉

家計簿の赤字余所目にようふとり

みの虫も枯枝さけて巣を作り

祝言も雇伸人にある事情

憎めない悪友今日は白取る気

岡山市 太森 娛句楽

月賦だけ残して離婚して戻り

肩凝りへ女の肘の力瘤

孫の手がソコへ届かぬ十二月

炊煙が並ぶ伏家に上る初春

松江市 吉岡 通児

お招き辞退祝電の代理です

底冷えの屋台背からさめてゆき

茶飲み友達にされて佗しい異性感

焼いもを頬張る口紅とは見えす

松江市 小林 孤呂二

訓導とちがう教諭へもの足らず

赤鉛筆折れて試案がボケてゆく

好きずきがあるから梯子酒になり

父になるが故に約束を違わさない

今治市 越智一水

世のさわぎ墨する僕へさわがしい

まな板の窪み女の涙秘め

すきま風こらえそこから愛つゝのる

おりて来た雀と語る日向ぼこ

岡山県 横山一声

夏服をつくってハワイでお正月

可愛かったエクボがしわで消えて行き

ハンドルは真直ぐ道が曲って居た

初詣お守り札も上って居た

新年号分

小松市 馬場魚山

腰に差すにも形のいる舞い扇

ガンだったと知るまい七回忌の仏

柿とすぐわかる包みで里の母

複雑な家庭見合いをくり返し

倉敷市 藤井春日

生甲斐の溢れる道にある歩巾

坂道を背負い直してゆく六十路

お得意の信用つなぐ嘘も云い

毒舌を齒車欠けた世に振るい

宇部市 平田実男

頼みごとあるらじ勉強素直にし

いい年の暮になったと選挙ボス

妻が留守すればしつかりする長女

する者がすればイミテーションには見えず

出雲市 原 独仙

冬將軍来れわが家に築地松

三味もってさあ唄いませと気を外ずし

平均の寿命を保ち初詣

楽隠居ですなとそちら様が決め

大阪市 河井庸佑

参観日うちの子わかった顔でなし

下心有るなと思う世辞並べ

手段とはいえ味方までだまし

人のふところあてにしている話しぶり

岡山県 出原敬一

飛行機離陸これが最後かも知れず

かくれん坊隠れる納屋へ犬が居た

気まぐれの愛をつかんで離さない

ふる里へ嫁の予約をしに戻り

島根県 藤井明朗

男性の過疎に婦人が村守る

見送りの隅に遠慮な女立ち

断絶の齒止めへ嫁の機嫌とり

新年のプランへ財布の事忘れ

鳥取県 清水一保

人生の悲哀白髪に知らされる

有終の美を柿の実の燃えて居り

選挙終え今日より元の過疎となり

我が城にがっちりペンを執る夜長

泉大津市 村上春巳

そう言えば松茸食べぬ秋でした

順序から言えばお前に残す金

脱都会飛鳥の里も人の群れ

元旦の空へ大きな深呼吸

平田市 久家代仕男

聴衆の拍手が票につながらず

実動十日の農機を借りて買い

出稼ぎのかつては君も精農家

雄辯を鼻で笑うて黙秘する

岡山市 池田古心

ありったけの智恵を絞ってこの不覚

疑いは疑いを生み癌と化し

まぼろしを追いつつ萎び果てんとす

魚にも喰いしん棒が居り俺の竿

広島県 高橋鬼焼

男からおれて平和な灯に語り

走れない後姿を冬が追う

そろばんをはじいてみても十二月

指切の指のぬくみに雪の唄

奈良市 宮口笛生

のむことの多き男の十二月

えらい目に合うたは下戸が酔いつぶれ

三寒四温四温の二日旅にいる

瀬戸の海見えず霧笛のかなしすぎ

大阪市 今西章雅

恍惚になる酒下戸はたしなめず

程遠い重役ねろうているゴルフ

ポリ袋すがたで荒巻鮭売られ

まじめくさった顔を皮肉に見て笑い

八尾市 古川鶴声

人間の唇に金借る十二月

クレジット師走の街を西東

順繰りで大臣と云う金儲け

運輸相臍線はたく事故続き

堺市 高橋千乃子

変身のドレスに合わす眉を書き

一生の歧路を唇に決めさせる

どこまでが真実女の横ざわり

おくりもの言いわけをしてなせおくる

広島市 山田季賛

子の方が僕の意見を先きに知り

ぜに金となれば老人も口を出し

クズカゴの残り蚊たたく秋深む

地凶塗り替える職幹線の用地買う

西宮市 藤村ベ女

シグナルの灯りつめたいみぞれ降る

沈丁花の香りの中の立話し

寝てからの句想に雨の音を聞き

靴音の凍りつきそな帰りみち

松江市 恒松 町紅

正論へ部下の味方になってやり

集金へまだお茶を出す美が残り

人間関係益交わしただけのこと

ゴマすりを意識している酒の席

大阪市 本庄 金三

人生流転あしたへ夢を賭けてみる

貰い風呂湯がめする程話しこみ

脱衣したモデルの顔が淋しそう

上京の母の手をひく繁華街

大阪市 江城 修史

人の計に吾が身をいとう齡となり

同情のあと味わるい言葉尻り

アイシャドー悲しき過去の色で塗り

捨てるすべなき残り火の昂ぶりよ

松江市 柳 楽 鶴丸

美しい虫の声生殖の挽歌です

一方通行を心から妻へ詫げ

変心をしました日曜はゴロゴロ

共稼ぎ愛のビタミンABC

大阪市 中川 滋雀

匍えば立て立てば親の手邪魔にされ

節まげてからほのぼのと父の愛

頭切り替えたら渦に巻きこまれ

ある一周忌

一周忌まだ思い出が温くすぎる

大阪市 宮尾 あいき

一人寝をねずみの奴も馬鹿にして

未亡人何と片身の狭い名よ

九人も産んで我家の子は一人

四季咲の運命きびしい寒のバラ

東大阪市 宮西 弥生

散ることも出来ぬ造花を拭いてやり

その噂ウソでありたい日のダイヤ

美しいウソ吐く女でミンク合い

ある覚悟女狂わす時刻表

竹原市 時 広 一路

点と点結んだ線が絡みあい

枯葉にも故郷の良さ詩があり

途中下車出来ぬ話に乗せられる

再会の骨は涙で洗いたい

和歌山市 野村 太茂津

酒うましみんな味方に見えてくる

酔うた気のシャネル五番を着て煽る

覚悟決め酔うてあげるへ怖くつき

満ち足りて恍惚の酔さすまい

岸和田市 葛城 伊三郎

離職して徒食は老の身を責める

ゲームマスへ造り笑いの京なまり

急病の電話を問えば痴話喧嘩

まきピラに吊られて買った不用品

倉敷市 竹内翁童

休耕は農政不信の花畑

ポイントは合わず父と子酒となり

もえつきた女が金の番をする

春日師定退し再就職

お祝を云えば涙の落ちそうで

倉敷市 能登原白水

返済をすませて馬鹿のように寝る

老人に同化している嫁のとき

髪染めてツギ木したよな顔になり

埋れ火に愛を育てた宿の下駄

岡山市 川端柳子

昼の月うすぼんやりとした記憶

あてのなく喪服眠ったままがよし

さぐろうとしない妻です平和です

沈黙を追及すれば冬の声

大阪市 西川誓二

お姑の舌で決ったおせちです

思案する男が憎い夜のしじま

愚息新婚点描

孫を抱く望み捨てさせ共稼ぎ

この親も覚えのあった睦まじさ

富田林市 和田維久子

和歌山刑務所視察 (三句)

更生の日々へ女囚の菊かおる

針運ぶ女囚の瞳虚ろなり

ミシン静か幻を追っている女囚

時の流れ堰き止めたいと願う今日

咽元を突けば忽ち虚偽となり 鳥取県 鈴木村諷子

酒飲めば酒が孤独をかきたてる

恐妻が世襲この家にいつの代

夫婦旅見せかけの和を偽装する

清冽な流れに素足洗わせる 鳥根県 小砂白汀

無限とはかかる青さか秋の天

むせかえる木の香を叩く槌の音

ひつきょうは無駄な抵抗だが釘まがり

送り出す妻と寒月観る勤め 枚方市 宮川珠笑

居眠りのひざが視線へまた開く

貰い泣きできる番組選って母

坐るひまないけど主婦としての幸

正論を通し注文また迷し 美禰市 安平次弘道

失業するから公害がまんする

物云えば役が来そうなのでだまる

形式論時代の流れ気がつかず

下関市 志賀木石

やわ肌を包んだ過去もある雑布

老婆の下駄を揃えて叱られる

はじらいや若さと言うは美しき

どんぐりころころどんぐりにあるつとめ

新宮市 川上大輪

いびきかく妻に明日も職が待ち

どん底に居るから苦にもならず生き

中立と言う憶病な位置に居り

振り出しに戻りなさいと除夜の鐘

竹原市 森井菁居

憤然と石ころ池の月を割る

驚くに足らず上には上があり

傷心の僕にはわかる雨の私語

かかる世へ短所となつてゐる無口

竹原市 小島蘭幸

組織とはありがたいもの立候補

素顔まだ見たことがないコンパクト

タイトルはいつそ無題とした野心

酔えば愚痴こぼす男に子が生まれ

東大阪市 竹中肖二

コマージュナル深夜放送向きがある

民放のどうでも見せるコマージュナル

いと軽く囑託の身は扱われ

薄くなる暦へ老のひとりごと

東大阪市 竹中綾女

やるまいぞに緊張ほぐす笑い声

集金を話し相手に過疎の母

バスやめて地下鉄にする俄か雨

石焼芋までダットサンに乗って来る

堺市 伏見茂美

友情は忘れじ四季の花に添え

俄か雨傘に入りたい人も下り

はるばると来たにお姿厨子の中

成仏しいやと父は一人言

大田市 藤田軒太楼

他人事でなし還暦の年迎え

義理だてもこれまで踏切る表沙汰

腹芸の余裕がみせた高笑い

過疎の灯へ耐えて水車のきしむ音

今治市 小笠原有里

五十路きて鏡の皺をいとしがり

理性など忘れ女の業に生き

肺ガンをかくす言葉の舌かわき

ルージュ濃く女魔性に変る時

尼崎市 高津徹也

琴の音を桐の一片が受けとめて

若竹よ つたえ歩きの出来た子よ

結論は次回にまわす村のどか

空伍が一つ鋪道に星が降る

呉市 植田英詩

スタイルは親父ゆずりの猫背なり

ストーブへ愚痴言う母も手をかざし

ネオン街素面で歩く馬鹿らしき

共稼ぎ植木の土も乾き切り

倉敷市 谷井扇水

学資得る夜の口紅と子は知らず

惜しみない拍手に敗者のも混り

反省の鞭勝ち誇る血を押え

新しい知恵は追い詰められて湧き

富田林市 板尾岳人

足腰へ五尺三寸まかせきり

この若さ山がささえていてくれる

飾らない山へ遊びに雲と雪

重さなつた峰と峰とに喋りかけ

笠岡市 高木桃里

山を買う話へいりり焚きそえる

産婦人科へ廻され親がうるたえる

投票の重さ一票軽く入れ

母がわりの姉の手で解くしつけ糸

新宮市 大矢十郎

頬ずりで育てた子にもうとまれる

入口を塞ぎ遠慮を叱られる

肉体の出ぬ小説へ出くわさず

小切手を書く間ハイハイのハイ

鳥取県 谷無閑

何を釣る人か話も振り向かず

安静のベッド雑念に悩やまされ

転任の噂に請求書だけが来る

指定席いやなライバル後に居

橿原市 岩井本蔭棒

さてどれが効いたんかないな痛みとれ

半日で妻の存在価値分る

原点到確かに立って無一文

功罪はともかくとして大勲位

大阪市 室谷徹舟

生活のためとは云えど海女の呼吸

券売機唾に切符を買うみたい

今日の日が倅せなければいいじゃないの

夫々の顔に個性があり愉快

八尾市 飯田悦郎

籠りいる退屈重ねて肩こらす

山無言歴史は語る風化仏

取材する記者が怪我して記事にされ

終電車発てばホームに来る寒波

島根県 中島 英子

栄光も苦悩も夢に喜寿を越し

堪え忍ぶことにも慣れて過疎に老い

教養のほどをゼスチュアからのぞき

子宝といっておれない世をなげく

大阪市 木村 水洞

選挙がすめば長屋に用はなく

慎しい貯金へ物価また騰り

年寄りに向かぬ映画が氾濫し

松江市 岡崎 祥月

石の沈黙踏まれても蹴られても

晩年の二人に光り与えられ

天と地をゆさぶる空と陸の事故

笠岡市 木山 遠二

長年の趣味へ老化がガクンと来

幸運な人よぼっくり逝てしま

総選挙

どの党も年金どっさり呉れそうな

加賀市 細呂 木魯木

筆始め毎年遺書を書いて見る

ふるさとがあるから出世したい見栄

茶目っ気なくせがお悔みに出てしま

姫路市 大江 秋月

新築後さっぱり金と緑が切れ

日曜大工一人前にお茶も飲み

不用意に舌打ちをした部長室

笠岡市 松本 忠三

いい歳をしてが妻のおはこなり

成人式一人で着れぬ晴衣裳

人間のすることですと無責任

愛媛県 村上 旭童

雑音の一つに母の親心

間に合わぬのが親方の肩をもち

その内に庭つくる気の石に苔

生駒市 草深 醉升

おもむろに老僧二十年後を語り

点滴を受けつつ国の末案じ

祖父五十年忌法要帰郷

ふるさとの過疎地に行つて落葉踏む

鳥取県 森田 布堂

奇形魚もいるふるさとの川となり

地球いつか月の世界のごとならん

過疎の尻に踏切もある通学路

倉吉市 渡辺 善句

冷房とは別に女の炎ゆる酒

焦点を妻に絞ってみる夜長

飼育されてると見てか犬あくびする

大東市 土岐トク子

一寸した仕種亡夫の影宿し

素直な気なつてしあわせ掴みとり

LLのママ新調のパンタロン

大阪市 飛田好一

大晦日どうにかなつたコップ酒

ポーナスが変身をして娘の晴着

よれよれの身体晦日の終電車

諫早市 原田明春

解散ヘタレントのような選挙ピラ

完成日飯場も今日は特級酒

義理で押した判印が家計くるわせる

島根県 大森孝華

ひたむきな一直線に巻き込まれ

たて横の糸をたぐつて話好き

陽のあたる坂道であれ母の詩

羽曳野市 塩満敏

酒のみの弱さ酒のみ知っており

建売りに情容赦ない冬の雨

新幹線富士をサカナに酒をのみ

松原市 玉置重人

義理で着たモーニングやのによく似合い

縄のれん愚痴ものろけも湯気に浴け

追っかけた噂シッポが切れていた

羽曳野市 大峠可動

關病の枯野へ還るのか汝

人生の晩秋涎ぶら下げる

飛び込める広さが夫の胸にあり

大阪市 神田秀峰

デパートの紙バッグ案外用を足し

座つたらもう居眠りの通勤車

北川春巢

★
ポーナスにダイヤ売り場を歩かされ

赤シャツを贈ってくれる子に育ち

寝たきり老人にはならないと自信あり

省線というたで年の嘘がばれ

ギブス繃帯の一月は遅々として

西尾 葉

お多福の妻の御慶のめでたけれ

ひそひそと話して母娘笑いだし

笑う日も泣く日もあるさ酌いでくれ

団交の日の短かさをしかと知り

落人の耐えに耐えにしわらべ唄

菊沢小松園

親切と思つた他人にしてやられ

北風に女を捨てし膚が哭く
なるようになって新聞記事になり
人妻とニア入り切りに来た余震

多久志氏の「凡愚のたわごと」
西の宮ここにも松下幸之助

川村好郎

古釘のかたくなとなる日の多き
どの顔を見せても妻はもう見抜き
七十の男ごろも隙だらけ

ふたり来し冬の醍醐の広すぎ
平和です夫婦で安いみかんむく
まだ生きてゆける自信のネジを捲く
淡々と古武士にも似た越年よ
言わでものこをひとこと老いの業
「凡愚のたわごと」上梓
綴り来しわが半生に悔多き
老妻も微笑笑をして読んでくれ

若本多久志

近 詠

須坂市 高峰柳児

腕組を解いて敵意をがらり替え
条件のきびしさ実印押す急場
漂浪の身で故郷へ意地捨てず
問い詰められて入知恵の底が割れ
呼鈴で出る留守番の重い腰

大洲市 米沢曉明

偽医者とわかった頃は癒りかけ
マダムから常連だけでない賀状
喜びの声公約を果すとさ

岐阜市 市川鱗魚

八重歯にも魅力女は果報者
市場籠今日モニターとしてのメモ
四ツ珠が父の苦手な申告書
むらさきの氣質が母の白い足袋
おひねりの覚えが古い下足番
春の町飴屋太鼓がよくひびき
母とゆうしんみ何時でも小風呂敷

今治市 長野文庫

政見と同様年頭の抱負
老境へ王手王手のお正月
飲め飲めと薬屋に酒すすめられ
去年から前進したのは月賦のみ

川俣柳 初篇研究

(百十五)

前田喜代人 川端柳風
 故
 岡崎重義 高須啞三味
 清博美丸 十府
 藤井和雄 岡田甫

681 氣にかけて母四ツ灸をいゝ直し

一甫

藤井||四火の灸とは既述の灸火のことで、癆咳の治療にすえた。

振袖を着あきて四火の沙汰になり一八・13病人の娘は四火の灸だといえ、癆咳と知って気落ちをするし、世間態もあるので、四ツ灸といひ直した母親。今なら化学療法でこんな気苦勞もなくなつたが。四ツ灸とは灸を四つの意。

川端「シクワ」の「シ」音を「死」に関係づけて、あわて「四ツ灸」と言い直したのである。現在でも病院など四号室は縁起をかついで欠番になつてゐる。

高須||川端説贊。これは「四花患門」の灸で「よ火をくべやれと御幣(おんべい)母かつぎ」と、「し」をきらつた言い方をした例は他にもある。必ずしも「四つすえた」から四火ではない。

岡崎||同。母親が「死」にもとれる「四」

を忌んで「よ」と言い直したのである。

丸||同。なお「四花患門」の灸穴は、それぞれ別個で、四花——川柳では四火とも書く——は大体乳の裏側の背中に四角な紙をあて、その四隅を点とするらしい。患門はこの四角の紙の両側二点を点とするらしい

岡田||諸説に尽きる。
 682 あてにするなどハむす子ひきよう也

一甫

藤井||長年月世話になつて立派に成人しながら、親に云う言葉が「おいらをあてにするな」とはひききような話だ。そんな息子は「たのみもしないのに、勝手に俺を産みやがって孝行しろとは……」という奴だ。前

出の同じ一甫の句「なに親をだましましよ」と息子いい」の息子は、口だけでも殊勝めいてゐるのに、この息子初めから挑戦的である。現代では「あてにするとは親父愚かなり」であらう。

川端||贊・親の意見に対するドラ息子の口答え。

高須||「息子卑怯なり」で、親に言っているのでは、この卑怯が利かぬ。女郎に言っている言葉で、これは相当遊んだ息子で、女郎と言葉かけひきをしているのである。

当にしていんすはいやないんす也一三・22という句があり、その返事のような句である。

岡崎||どら息子同士のかけひき(連れ出した張本人の息子が、仲間にオレのフトコロを当てにするな——と突っ張つた)と思つていたが、例句から高須説に賛。
 清||女郎の無心に対する返事である。
 ある夜のむつ言にあてにしていんす

傍四・11

という女郎の無心に対し、客の方はなかなかはっきりした返事をしないもので、まあうんといひなんしよとつめりあげ

一七・40

ということになるのだが、主題句における息子は、きっぱりと「当てるにするな」と返事をしたのである。

丸二同右。

岡田二同。当時中流以上の家の青年を、他家の人も「息子」と呼んだのです。

これ息子一分捨てる気はないか 二・30
の句など、一分を投じて遊びに行かぬかの意。自分の息子に云ってるのではないことにご注意。この句なども同様で、息子対親と解してはいけません。

683 石に勢あつてかたまる赤穂塩

龜遊

藤井二石は大石良雄。この場合勢は大石の「力量」と同志の「同勢」と双方をかけている。すなわち大石に力量があり、同志多勢が赤穂塩のように団結した。赤穂は塩の名産地。城と塩との語呂合わせ。

大石は忠臣蔵の土台なり

大石の土台にいろは組み立てる

大石の文鎮にする仮名手本

高須二原本は「赤穂塩」それがかたまるが洒落になるのだが、それだと純然たる狂句

岡崎二贊。赤穂塩は行徳塩とともに全国に知られた名産。赤穂義士の名誉を利かせた狂句。

丸一贊。

岡田二同。なお一言すれば、塩のニガリを入れると豆腐がかたまる。句の「かたまる」は塩の効力を利かせているので、この句が頭でこねまわした狂句臭のあるユエンである。

684 どの／＼の手をとり孔子よまる事

岸口

藤井二再伯牛は德行に於て、孔子が常にほめていた弟子の一人。伯牛が悪疾（癩）を病んだ時、孔子これを見舞って、窓よりその手をとって「この人にしてこの病ありや」と歎じた。どろどろの手は癩のためくずれた手。よまいごとはグチ。かったいのそばで孔子はよまいごと

一四・35

高須二贊。「どろどろの手」といい、「よまいごと」といい、どうも感心しない表現である。そのせいか、この岸口という人の句は非常に少なく、わずか四句だけである丸二同。「この人にして……」は、凡人にはよまいごととしかうけとれない。

岡田二同。

685 ひもじかるふと振袖の儘て抱き

万 襲

藤井二既述の子持ち踊子の哀詩。生活のためとはいえ、華美な振袖姿のまま帰宅するや否や、着物も着替えずそのまま「オオ、

ひもじかつたろうよ」と子を抱いて哺乳すの踊り子の聖なる母の姿。佳句。

川端二贊。

かかさんといふとこれだと棒でぶちねえさんと云ひやと芸者を育て

の四五人の親の句もあるが、

のような綺麗な句もある。

初・3

高須二子持ち芸者の句で、類句も多い。

内へ帰ると二ツ乳をさらけ出し

丸・岡田二贊。

686 後口にも目の小千ある大あたり

五 扇

藤井二既述の「大当りうしろにも目が五六百」と同じ。今度は目が倍になったが

五百人げいの背中を見て帰り 一三・16

があるから、目が千、すなわち五百人が羅漢台の人数の限度であろう。

高須二小千という表現は千近くということとで、必ずしも五百人が羅漢台（大入場）の限度でなく、前例の大当りの句にしても、「筥四」には「二三三百」となっているくらいで、大人数を言っただけのものであろう

清二羅漢台の人数に関する例句が、いずれも五百人になっているとは、本所五つ目の

丸二贊。「目の小千ある」は清説のとおり

で、羅漢台の収容人員とは関係ない。

岡田二同。羅漢台は絵で見ると、せいぜい

五十人ぐらいいしか坐れない。

私のいま住む街から手の届く辺に関市とい
うのがある。関の孫六の名で世に知られた刀
鍛冶の里だったところ。その老刀匠が私に
語った言葉に「師弟の間柄とは、ともに与え
られ合うものでなければ真の師弟とは申せま
せん」というのがあった。私はこの一語に膝
をたたく思いで感銘したことである。

師匠の貫録

刀匠の筋にも正宗と村正があるように、俳
諧にも万象の「筋」が自ずと介在して一家を
成しているようだ。巨星芭蕉は、門下二千の
称の中にさきの刀匠の一語にも似た「与えら
れあう」門下の高弟を捉え得たのは、果して
幾人であつたらうか。

芭蕉はつねに豊富に他人に対し、自らのも
のを与え続けたが、彼はそうすることに
よって彼自らも相手から得るものは得ていた
のである。

たとえば芭蕉は、よく弟子に自分の作った
句を示し、これをどう思うとか、これとこれ
はどっちがよいと思うかーなどといういろと
弟子たちの判断を訊くことを常とした。

このことは、彼自身判断のつかない場合も
あつたであろうが、それとともにこの句が他
人にはどう判断されるかという、他人の見方

を知る故にも役立つことになった。こうした
ことで、自分の気のつかない立場からする見
方を知って、自分の生活や芸術を鍛錬する上
の参考とするいき方をとる。

一方、弟子たちからすれば、これは師の世
界に入りこんで、師とともに共同製作を行う
との感じ方がある。この師と弟子との対話こ

そ芭蕉とその弟子の作句環境を甚だしく高度
なものにしたことは成行きである。

こうした双方の対話の作句の場にこんな例
がある。「人声の沖にて何を呼ぶやらん」と
いう前句に、芭蕉が「鼠は舟をきしる暁」と
つけた。この句会のおと、彼は許六に、その
感想を求めたところ彼はこう答えた。

「さてさて、この暁の一字ありがたき事、
あだに聞かんは無念の次第なり、動かざるこ
とこの一字大山の如し」

「師、起上りていわく、この暁の一字、聞
きとどけはべりて、愚老が満足かぎりなし。
この句はじめは須磨の鼠の舟きしるおとと
と案じけるとき、前句に声の一字有りて、音
の字ならず。よって作りかえたり。須磨の鼠
とまでは気を回したけれども、一句連続せざ
るといへり。予が言う、これ須磨の鼠よりは

るかに優れり。勿論、須磨の鼠も新しく覚え
はべれども、舟きしる音という下七字は後れ
たり。上七字とは首尾調わず、暁の一字のつ
よきこと、たとえばはべるものなしと申せば、
師もうれしくおもわれけん、これほどに聞い
てくれる人なし。ただ予が口よりいい出せ
ば、肝をつぶしたる顔のみにて、善悪の差別
なく、鮎の泥に酔いたるごとし。その夜、こ
の句したる時、一座のものどもに、われ運參
の罪ありといえども、この句にて腹を癒せ
よ、と自慢せしと宣ひける」俳諧問答こ
う記す許六は元來がうぬばれ強い男だから、
語る通りそのまま信用するものかどうかと思
うが、とにかく「暁」の一字の働きを認めた許
六に対し、芭蕉が喜び感謝したことにはよも
やまちがいはなさそうである。またこの師匠
の気持が、やがては許六にかえり彼をして少
からず昂奮させたことは疑う余地はあるま
い。

いまもむかしも、おのれ独りの発想句作は
孤独なものである。芭蕉は一しおそれがきび
しいが故に、許六の言葉は彼のころをあた
ため、一種の救いをさへ感じさせたであろ
う。許六にその心がストレートに伝わる。許
六は許六でそれが師匠から特別扱いをうけた
という誇りと自負を感じて気の昂ぶりを覚
える。師は弟子を、弟子は師をたえず刺激す
るこうした生活が、芭蕉とその弟子の間を一

層の固いキズナにしていたことでもある。

芭蕉が他の宗匠達と同じ様に、招ぜられて俳諧の座にいたことは、前号の通りだがやはり一世の俳匠、その座のしきり方が如何に芸術的にも立派であったことかは、端的にいえば延宝八年の「田舎の句会」や「常盤屋の句会」だけを挙げても至極はつきりしている。

刀鍛冶と異り俳諧の秘伝授受には格別のこととはなさそうだが、俳諧にも刀匠なみの「受代」なる大層なものがあつたことは前号評述の通りである。芭蕉にもそれがある。彼の場合は「伝授」といつている。しかし彼は、貞徳が西武に伝え、西武が随流に伝えたようなものではない。芭蕉の伝受なるものは、古来の「古今伝受」とか「三鳥三木伝」だとかと和歌の道でやかましくいつているしろものとは大いに意味がちがう。それは聴いても、聴かなくとも、自分の創造の生活にはなんの関係もないような、微妙なななどというか「自然としらざれば知り難い」境地のものなのであつた。

たとえば「切字を加えても、付句の姿ある句」があつたり「切字がなくともきれる句」があつたりするなどという事を言つてきかせるとにしても、きく者が初心の作者であつたとしたら、なんのことだかわからない。それだけでなく、それで迷つて句作もできなくなつてしまふのである。去来は「また壮年の

人の句はさびしきり見えざるも却つてまたよしといわんか。初心の作者には、さびしおりを容易に説くべからず、かえつてその吟口閉じて新味にうつりがたし、これ先師の教えなり」要するに芭蕉の伝授とは、順序段階を経たある水準に到達する成熟過程を重視することをいつたものと私は解釈している。

去来が「おとついはあの山越えて花さかり」という句に対し芭蕉は「この句、いまさく人有まじ一兩年まつべし」と訓したのが伝授といえよう。彼の持論は「作者の気性と口質によつてなり」で、作者の個性をあくまで尊重している。例をあげれば去来は温厚篤実の句風だし、凡兆は写生句が得意だが、惟然はもつと味合がちがつた。

「先師遷化の年の夏の惟然坊が俳諧を導き給うに、その得たる口質の処よりすすめて、

磯際にざぶりざぶりと波打つて、或いは杉の木にすうすう風の吹わたりなどという風趣を賞し給う」

などはその芭蕉の伝受の一法がうかがえよう。

師弟とは、もともと相互の人間感性尊重がつながりの基盤である。芭蕉が弟子と相對しての俳諧修道は実にこの大道に立つていたのである。「三草紙」「去来抄」「俳諧問答」などはその足どりの最たる史実で、其角が芭蕉終焉の一世一代の名文を書いているのも、師おのれを知る故の感奮の發露といえよう。

芭蕉は日日新らたなる創造の生活を「風雅の誠を勤(せめる)生活を生かして、その独自の世界をつくり上げていつたのである。その意味からすれば芭蕉俳諧は「底をぬいた」俳諧であつた。一処に停らぬ俳諧故にそれが

いえた。許六は「ひたすら曠野狼みのもの二集に眼をさらし、昼夜句を探ることにひまなし、少し探り当りと思えば、跡より師の吟じ出し給う句大いに相違せり。その風探りみれば、また跡の句似たる形もなし」といつている。去来は「師の風雅の見及ぶ所、次韻にあらたまり、みなし票にうつりてよりこのかた、しばしば交じて、門人その流行に浴せん

東野大八

ことを思えり」といつている。芭蕉の不易・流行の説のエキスこそ以上の語りにこそありと思はれる。げにも

——芭蕉去つて一列白き波がしら(半文銭)の句に尽きていよう。わが柳界にもこのような「師」が果して存在したであらうか。これ無き故に川柳は細身に尽きた、そう想わざるを得ない。

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

橋高薫風

きょう一日を笑わなかつた守衛

谷垣史好

守衛の習性をうまく捉えられた。自由律の日記風、報告的な乾いたスタイルで成功したのだから。

除夜を待つ炬燵に万太郎句集は、前者と打って交って除夜の近づくしじまと万太郎句集の、かそかにして艶なる内容とが微妙に関連して良い味を出している。そう見ればこの炬燵も万太郎の句のつややかな情趣の世界のものとして受けるのが妥当だろう。

敵方へ廻せば怖い人へ酌き

本多柳志

人生には舞台の裏の工作が多いものだ。そしてそれには酒がつきまとう。手軽だからだろう。まず一番に飲ませねばならぬのは「敵方へ廻せば怖い人」なのだ。

紫を着るには心貧しき

小出智子

紫は昔から高貴の色の一つだ。ある日、ふとわが心の貧しさに思い当たったとき、紫の着

物がどうしても着られなかった。女のこころの綾。

パチンコにファイトを燃やす小役人

奥谷弘朗

この作者のものする小役人を題材にした句には、自己を見据えた本物の姿勢が感じられて、それだけに心をうつものが多い。

蓋付きの夫婦茶碗を大事がりも、その範疇に入れられる句だ。「蓋付きの」とことさらにおおしきは小市民的のもので、上五の軽妙さがこの句の味になっている。

往診の鞆の間通り抜け

垂井葵水

演出臭い句だけれど、この演出甚だ見事なのでその臭みがちよう消しになった。子供の急病でもあろうか。暗い患家に一問華やかな難の間があり、医師は、そこを通過して患者に接した。医師も微妙に心が変化したことだろう。

幻想の美女にまみえん紅葉狩

西出一栄

見て楽し舞妓のような京の菓子
高橋操子

女流のベテランのともに艶やかな句。俳句に「如月や日本の菓子の美しさ」があるが、川柳はもっと具体的に表現する。五色豆を詠まれたものだろう。

ポスターだけが笑顔で迎え

吉田水車

旅に出ても何処も混雑の連続で、疲れに行ったようなもの、その土地の人情もゆるりと味わうわけにはいかぬ。そうだった状態を、

このように表現された。

当り歳六分の四が過ぎて居た

川口弘生

川柳が俳句と異るところは、この句のように、例えば情緒などをかろけ捨て、計算づくで割切っても、内容の「ことわり」がしっかりしていて訴える力があれば上等の句といえることである。平均寿命の六分の四を経た作者の感慨がよく理解出来る。

神の撰理にさらさらと流される

天正千梢

「次第に小さくなりやがて消える夢」という句と関連している。信心を得た作者なのだろうか。人間、こう悟り得たら幸福だ。

氷上に力があふれホイッスル

有信新之助

アイスホッケーなる前書がある。私も札幌オリンピックで、この光景に会った。力と力の激突の一瞬後、笛が鳴る。競技者も観衆もひとときの力の弛みを感じる。競技者は、氷上をスティックを構えることなく流し、観衆は吐息を洩らす。その光景が、十七字でまさきと浮かばせる力量は見事なものだ。

謙遜のような自慢を聞いてやり

吉岡青香

謙遜をしているようだが自慢話、よくあることだ。勿論、盃を手にしたことであろう。

機関士のプライド停止位置ピタリ

景山綾美

国鉄私鉄に限らず、日本の鉄道の正確さは立派で、この句のような当事者個人の誇りが大きな支えとなっているのであろう。

「旅人」以後の 麻生路郎作品

— 21 —

三十八年三月号

不朽洞句帖

右翼が生き生きと脈うっている
たこ部屋で明日なき命思うなり

医師一斉休診

麻雀にいてはるそんな休診日

ああ云えば斯う云うだけの政治家よ

色気抜きとなると主張は譲らない

ドヤ街に殺されそうな女いる

仁術に窓口などは要らぬ筈

ドシドシ死刑にしなさいと天の声

本社二月句会「三味線」

いろ気では売れず俗謡弾かされる

三十八年四月号

不朽洞句帖

もう死ぬと云うのに寄附を出し惜み

サギだそうな政治家のなれの果て

老いらくのパンとチーズが続くなり

インテリの痩せられるだけ痩せている

白髪なり鬢なり色気まだ捨てず

自動車代払わせ女巣に帰えり

養老院でも女化粧を忘れない

みだらに見える枕二つよ

本社三月句会「先代」

it is ぐらいで先代外遊し

南海電鉄川柳会「スピード」

改札をトップで出るも若さ也

大阪通信病院川柳会「初出勤」
初出勤机のカギを忘れて来

三十八年五月号

不朽洞句帖

上に伸びる一方の筈の孤独

日記空白今日は疲れただけのこと

デパートの中二階へ来て欠伸する

僕と天皇だいぶ近かしい気がしだし

死にかかっているも妻子を養う身

一徹な養子も語尾はにござとき

長男の自殺ギターはそのまんま

昔の女にとうとう死にやはったかと云われ

大阪通信病院川柳会「女難」

女難ですよと淋しい笑なり

南海電鉄川柳会「私鉄」
親も子も同じ私鉄の飯を食い

(傍 島 静 馬)

川柳 中山道六十九次 (1) 富士野鞍馬

序

江戸川柳は、東海道五十三次には普遍的に深い興味をもっていたが、中山道六十九次には部分的にしか興味をもっていないので、川柳に詠まれていない宿駅が大部分である。京都でも江戸でも「木曾街道」と称されたのであるから、木曾路の各駅には相当川柳が詠まれている。そんなわけで、前に東海道五十三次を書いたときには、その全宿駅の川柳が展示できたが、この中山道六十九次は、その半分ぐらいより川柳句がないのは、当然であるが遺憾である。参考書としては、文化二年版秋里離島の「木曾路名所図会」を用い、里程記事もそれによった。この図会の序文を、拙家の分家富士谷成元が書いているのに何か親しみを感じた。

六十九次

慶長五年(一六〇〇)幕府は、江戸を中心として、東西の重要地点に向う主要幹線道路五街道を定め、江戸から京都に到る街道としては、南の東海道にならんで北に中山道が設けられた。

この中山道は、木曾の山中を通っているの
で、木曾街道・木曾路とも称され、江戸の日本橋を起点として、武蔵、上野を北に過ぎり、碓氷峠を越えて信濃に入り、追分宿で北国街道と岐れ、西に進んで和田峠から諏訪盆地の北部を通り松本平に入り、鳥居峠を越え木曾谷を通り、馬籠峠を経て美濃に出、近江草津で東海道に合して京都に到るまで、全道程百三十四里(五三六キロ)の間に宿駅を置くこと六十九、そのまん中に当る福島宿には関所が設けられていた。

この街道は、参勤交代の諸大名の往来はそれ程でもなかったが、日光例幣使をはじめ諸役人の通行路と定められ、東海道とちがい、洪水川留になるような大河は少なかったもので、庶民の旅にもきわつた。行程、日数も東海道より多くなるので、西国大名でも儉約なものはこの道を利用した。この街道は東山道を通るのであるが、南に東海道あり、北に北陸道あり、その中にあるから「中山道」と名づけられたのである。日本橋を起点として東海道、中山道、日光街道、甲州街道、奥州

街道を「五街道」という。

雲井まで登る木曾路は裏階子

吉野から戻りに丁度木曾桜 三輔(一四三六)

川留にこりて双六にない旅 木邦(一五〇五)

川留にこり棧道を通るなり 玉麿(宮三〇)

諸所に棧道あり 石斧(二〇三)

木曾路では重き枕をさせる也 狸声(コリ三九)

旅館の待遇はわるいが安かった 風庵(四三六)

仁者でも山に飽きたる木曾の旅 和笛(二一三)

論語「子曰知者楽水仁者乐山 宝(一三宮一)

神慮にもごころうのない木曾路なり

半ふんは木曾路を通ふ松の風

— 松は徳川家

起点 日本橋

江戸から各地への里程の起点は、日本橋の

中央と定められて、

日本橋何里何里の名付親

(三〇五)

諸国への追分にする日本橋

芝丸(二二二)

道法りの総元締は日本橋よし子(四三三)

日本橋かつては足のむくところ(五二八)

日本橋どこへゆこふがすきな所(三二七)

と川柳に詠まれている。「江戸名所図会」に

「日本橋・南北へ架す。長さ凡そ二十八間、

南の橋詰西の方に御高札を建ててらる(中略)

この地は江戸の中央にして、諸方への行程も

この所より定めしむ。橋上の往来は、貴とな

く賤となく絡繹として間断なし、又橋下を漕

ぎつたふ魚船の出入、且(あした)より暮に

至るまでごうごうとしてかまびすし。」とあ

り、川柳は

日本橋富士を並べし人の山

玉守(二二二)

おく霜の白きは見せぬ日本橋

錦糸(四〇二)

足音の昼夜たへざる日本橋

雪山(三三四)

日本一をふたつ見る日本橋

春駒(五九〇)

南詰西側の高札を

おつかならしい札のある日本はし

(三〇三)

日本橋右を背くと左だぞ

美德(三二二)

東側には罪人の晒し場があった

御政道ぬれものを干す日本橋

逆茂(一〇一)

日本橋馬鹿を尽したさし向ひ

(七五)

死すべき時に死なざれば日本橋

(一一三〇)

—心中未遂

北詰には魚市場があつて

日本橋竜宮城のみなとなり 蚕虫(四八二)

魚鱗の備へ立つて居る日本はし

文和(二六六)

日本橋ととでまんまを喰ふ所

金魚(七二六)

日本橋は御府内の台所

聽見(八四七)

初松魚飛ぶや江戸橋日本橋

(武十六三)

中山道を行くには日本橋を北へ渡る。その

左側横丁(駿河町)には、日本一の大呉服店

越後屋がある。

越後屋も江戸三ツ見の道具なり

(明元智)

江戸のするがにも日本一が有

(一六三)

駿河町畳の上の人通り

(初一六)

越後屋の庭を大名通るなり (安丸九)

昌平橋を港って本郷台へ出るのであるが、

そこに聖堂がある。孔子を祀り江戸時代の学

問所であつた。

聖堂は宗旨の知れぬ手を合はせ

聖堂で叱られている干社札

(明元智)

どふ思ったか聖堂でじゅずを出し

千之(二二七)

聖堂は仁義後ろに霊地神

早川(八一)

—神田明神

本郷へ出ると三丁目有名な兼康という菓

屋があり

本郷も兼康までは江戸の内

(出典不明)

—この辺で江戸払いになつた

かねやすは不断祭の通るやう

美德(二〇三)

本郷の屋根に神農掛り人

三箱(三三三)

—看板に神農

五、六丁目は、百万石前田侯の中屋敷

玉川(四〇〇)

本郷は是我国の梅の花

夢中(二四三)

本郷を梅屋敷にておつふきぎ

—梅は前田家の紋

果鴨道通つて板橋へ向うのであつた。

果鴨道小菊で巻た鼻緒摺れ

夢輪(九三三)

—小菊は紙

尼 緑之助氏句碑除幕式祝賀句会と

山陰方面の本社主催の観光旅行

本年五月十三日(日)に、島根県日御碕でおこなわれる尼緑之助氏の祝賀句会へ、本社主催の観光旅行が合流します。大阪出発の日程や会費等などは追つて発表します。

川柳塔社

水煙抄

菊沢小松園選

岩国市 村 井 酉 合

ひと言がすさぶところに灯をともし
つまれてもつまれても咲くゆめの花
ことばには出さず耐えてるところが好き
ひと言がわたしの明日を変えてゆく
生きがいを押しつけられる味気なさ

岡山県 嘉 数 千代香

ノックして心の姿勢たしかめる
紙幣積み上げてニンゲンの血が凍る
信じまいと焦る心を風が抜け
逃げられぬ悔悟へ黒い蝶が舞う
童心に還れず地を這う奴風

大阪市 阪 上 十止庵

道草を愚痴りつづけた妻も老い
物欲の際限もなく老いて汗
血統のよさかやたらに吠える犬
ミニもよし風邪を引くなと娘に祈る
ヤケ酒の限度妻子の顔泛ぶ

大阪市 小 谷 葉 子

掌で消せぬ炎の貌つくる
空白の椅子あり亡父の声があり
振りむいた心盗んだ手の温み
倅せの一本の薔薇持ち歩く
継足して愛のレールはなお続き

豊中市 安 藤 寿美子

鍋の底こすっていても夢があり
地の底にねむる可能な芽を信じ
根っからの庶民で生きて今日も無事
紅一点二点目が来てはっとする

和歌山市 秋 月 宏 方

日本の楽器の一つ大太鼓
売った株きょうも上って新高値
結婚という人生のくじをひき

日和山海岸

澄んだ海龍宮城はこの奥

岡山県 武 元 柳 子

世につれて変るかるたにとまどいし
ささやかな夢を育てる日記買う
風邪の子が見ている硝子越しの凧
書きかけて立つこと多き年の暮

尼崎市 中谷利美

二人目が出来て愛語の種が切れ
口だけは男女同権負けて居ず
子の世話にならぬ貯金がはかどらず
呉れたから貰った金が命とり

和歌山市 垂井千寿子

ブームには遠く主婦の座を守る
男の勝負それを私は覗けない
チビた下駄女ひっそり隅にぬぐ
もうゼロにもどれぬ仲を庇い合う

今治市 大本バット

寝そべったお風呂の窓が夕焼ける
良い嫁が来て味噌汁の味も継ぎ
大物の持つものさしは桁違い
紅を差す指が女を主張する

竹原市 三宅不朽

花缺しずかにはげし思惟の音
勲章をつけてもただの影である
しゃあしゃあと嘘をならべて選挙すむ

島根県 堀江芳子

一瞬の光を夫に嫁がす日

叩かれて悔なきころ月といふ
らしくあれ嫁ぐ日近い娘へ祈り

守口市 岸本豊平次

一月はどう暮す気か暮れの街
足音にとまどっている立ち話
縫いぐるみ抱きしめた手に見はなされ

東京都 宮崎美津子

呼び出しがやっと出た時一通話
傾斜する心ハンカチ握りしめ
息災の老母はいつでも影法師

氷見市 関美子

稲光り深夜を生きる人の影
ワンボタン違えたまんま そのまんま
恍惚がわが延長線にあるを知る

河内長野市 井上喜醉

痛いところ触れたら嘘はすぐにはれ
大物に背中叩かれ励まされ
人の気も知らず盆栽枯れてくる

備前市 武内雅堂

負けられぬいくさよ妻の影が伸び
ながい目で夫の呼吸みつめたり
酔うほどに女の意地が消えてゆき

東大阪市 落合思月

女史というレッテルデートもしてくれず
寝たきりの姑が世帯へ口を出し

テレビにもあきた金のない日曜

大阪市 堀 口 欣 一

尼さんの頭丸いの四角いの

新世界香車が一つ落ちていた

横顔は今もグロリア・スワンソン

和歌山市 樫 村 ふみよ

時効にはさせぬ女の嫉妬心

御無沙汰はしても心にいつも住み

家具でさえその場に慣れる日がかかり

今治市 渡 辺 南 奉

だまされる事にも慣れてうろたえず

マンネリでよしマンネリの中の幸

無口にもプライドがあるマイペース

大阪市 柳 原 静 香

孫が来て小鳥の水も忘れられ

孫が去に師走の寒さ身に沁みる

俺だよと呼びたかる遺休未確認 (日航事故)

新宮市 川 上 富 子

このくらいかしら靴下編みあがり

転ばないようにとつなぐ手のぬくみ

振り返える弱さ女に武器がほし

島根県 梅 みどり

原点にふれてわびしく子守唄

明日の夢育て明るい灯を囲む

ひよんなどこ似ててうなずく血の温み

島根県 榎 原 秀 子

すきま風砦を持たぬ身に沁みる

日溜りへ心の通う詩があり

絶えて久し木枯に描く女があり

藤井寺市 古 結 百 水

先生と云う名の倫理に縛られる

勘ぐれば疑う程の残しよう

墨染めの袖へイブの菓子を買ひ

鳥取県 林 露 杖

幽かなる紅綻びし冬薔薇

犒いのその一言をいそぎれ

目の合った捨て犬必死に追ってくる

島根県 東 原 福 子

恍惚の人にエデンの子守唄

踏みしめていまのあかりをしかと抱く

枯切った引戸手応えなく開く

島根県 谷 岡 芳 枝

打あけて柘榴は雨に濡れただけ

節々に悲しみ綴る袖織

この梓にしばらくは雨に濡れただけ

豊橋市 鎮 浪 翠 月

老いていく我身に今日も鞭を打ち

顔よりも心がやさしく美しく

すぐ腹をたてるところが若すぎる

守口市 野 呂 杜 月

既にして呱呱の声にもある個性

一枚の紙鶴となり語りかけ

お天気の予約は出来ぬ周遊券

嫁板について皿割る数が減り

うす墨の交わりなればさらさらと

拗ねて居る箒は手先だけ動き

お見せする観光太鼓派手に打ち

渡る人無くても青の持時間

燃えつきる紅だから美しい

里芋の親は畑で凍るのか

母の棺子が八人で軽く持ち

叱られた話し初七日酒になり

又逢えるテールランプが消えて行く

ピリオドを打って二人のものがたり

今日の幸活ける鉄の音が冴え

先生もまじって楽し花一匁

マイホームローン済むまでもつやろか

正月がそこまで来ると凧が云う

爆笑の渦でピエロが泣いている

今治市 今井松花

本妻は金輪際の座に坐り
つくづくとスベアーの欲しい胃を撫でる

竹原市 楠

船長と云う名を消した日の夫

旅の恥若い心の旅つづく

お金にも年にもふれず旅たのし

ジャジャ馬に見えぬ今宵の角かくし

無茶云うな云うてよいこと悪いこと

うけ売りを又聞く欠伸かみころし

逆境が不平を云わぬ人にする

孫の絵を貼ってひとりの部屋たのし

落ちる日を知って木の葉の身づくろい

露にぬれてもよいんだ野道行く

九牛の一毛として投票す

麻雀という袖の下紫煙満つ

大安吉日どんどん押し出され

目覚ましがにくらい程早く鳴り

味噌汁の今日は辛口なんですの

またひとり網にかかっている自慢

死んでまで愛は不変という誤算

和歌山県 ぶきあげ

和歌山県 ぶきあげ

和歌山県 ぶきあげ

和歌山県 ぶきあげ

和歌山県 ぶきあげ

貞子

体臭を消して土曜の夜の顔

竹原市 生 信 笑 子

未知数と言う貴方にかけている

引き出しへ過去とじ込めるカギをかけ

大阪市 河原林 比呂路

もう喧嘩したと新婚うれしそう

泣きやんだ子を注射器がまた泣かず

大阪市 藤 田 頂留子

木枯しに一葉対決するよに散り残る

ポーナスへ使え貯めろとピラ合戦

仙台市 川 村 映 輝

気休めに喋らしてから多数決

客減った分だけ値上げの理髮料

羽咋市 三 宅 ろ 亭

置きものの牛に歩みを教えられ

町内会大きな声が他を抑え

青森県 波 ただお

白衣の天使も唇だけは紅

はつきりと計算をしてポーズとる

鳥取市 雨 川 洋 々

詩情ふと神話の国の駅に降り

陰膳の箸はあの日のまま置かれ

寝屋川市 福 富 隆 子

買物籠さげて選挙もついでです

あああ夫無料医療の年に老い

呉市 佐久間 文 明

新しい決意無言の眉となる

2DK寡婦こじんまり美しく

大阪市 松 本 市 郎

飛行雲切れ目にぼっかり昼の月

顔洗う水が冷たい手のやせよう

愛媛県 小 山 悠 泉

相槌を打って上手に世を渡り

仕合せを掴んで欲しい高島田

今治市 蔦 本 昌 道

核家族寄り合う母がある茶の間

木枯しが鳴る貝殻の戸を叩く

島根県 岩 田 三 和

変身をすればきれいなアゲハチョウ

値下げするシャモジにつくなくまい米

大阪市 岡 本 まさひろ

やっとこさ出るには出たがお義理だけ

自動ドアご念をいれて閉めてはる

新潟県 高 野 不 二

顔見合せて焼芋大きいのが残り

人間の行列を見ているパンダ

樫原市 西 本 保 夫

平社員の気易さ別につくろわす

叱られた方へ肩持つ平社員

大阪市 小 谷 清 女

なめらかな嘘が舌からすべり出し
紅白も聞き疲れする歌なかば

大阪市 新 川 貞 祐

借金も美田も残さず召されたや
古いのか親にしたこと子に求め

松山市 谷 の ぶ お

言付にそむかぬ妻の背丸く

あたたかい寢床に明日は考えず

桜井市 北 嶋 忠 明

特売場良人は店のそとで待ち

石に矢のたとえを引いて励まされ

愛媛県 小 笠 原 仲 美

夕風ぎの海やすらぎを抱いてくる

お隣が儲けて夫叱咤され

茨木市 日 高 文 子

中三で母の自信をこきおろし

五円玉に替えて重さを楽しむ児

大阪市 平 井 露 芳

風駆ける音にも宿直耳を立て

もみじ迄揚げて自然をじかに喰い

今治市 伊 藤 一 郎

ごね得とばかり国からふんどくり

後からでない歩けぬ明治妻

今治市 真 山 彦

話だけ聞けば共産党が良い

私もだ日本人の気短かさ

今治市 原 田 輝 親

感謝するくらしへ自我が棘を出し

新米を供え瑞穂の民に生き

鳥取市 有 田 鹿 の 子

落葉樹又くる春へ散り急ぐ

出られない旅をきれいな夢で追い

米子市 増 田 竹 馬

手術室の廊下に秒をきざむ音

孝行が小包で来る十二月

鳥取市 大 塚 豊 生

足跡をみな消してゆく砂嵐

カメラマン一回きりのチャンス追い

氷見市 有 磯 涙 月

伝統の流れよそ者変えられず

マイカーの横が凹んだだけで済み

寝屋川市 江 口 度

一升瓶飲過ぎに注意とは書いてない

足ぬいたかたちにズボンぬいである

弘前市 小 山 内 貞 男

コマーションルに女の虚栄くすぐられ

雪が舞う津軽のリズム風にのせ

竹原市 古 江 雅 鳳

点滴へ生きる願いの眼をつむり

病むベッド生きねばならぬ気のあせり

須賀川市 平 栗 金太郎
落選に掌の平返す小役人
炬燵から猫を追ひ出し差し向ひ

堺市 栗 本 藤 持
このさいと母も着飾る七五三
散髪の暇もないとて将棋差し

倉敷市 井 上 濤 笑子
新茶蒸す老の双眸かがやきて
笑うことばかり炬燵のにぎやかさ

島根県 安 達 小茶坊
初恋の涙菜の花だけが知り
まな板のくぼみでつくる今日の幸

寝屋川市 井 上 武 松
長女初孫誕生
命名は婿の親爺が先につけ

羽曳野市 麻 野 幽 立
叫び度き衝動海が広すぎて
庭があり樹があり猫と日向ぼこ

大和郡山市 森 田 カズエ
個性的ひらたく云えば頑固なり
舌を噛みそうな錠剤のまされる

泉佐野市 大 工 静 子
老二人三鉢並べて菊見酒
嘆くまい我手に育てた罪もある

岡山県 沼 本 美智子
我が里はあゆがまだ住む川が有る
男の子何を送れど返事なし

鳥取県 藤 本 鎮 也
別居する肚で栄転引き受ける
男だけの見栄あり苦境にじつと耐え

鳥取市 藤 本 佳 女
青空をころげころげてアドバルン
使ひ捨て時代と夫が捨てて逝き

鳥取市 藤 本 恵 子
公害を吐く煙突を兎と見上げ
虹に似て新人はかなく消えてゆき

高槻市 山 田 スミ子
冗談を言わぬ子供をもて余し
学歴にかかわりのなし隅に座し

大阪市 岡 部 シゲ
冬座敷片づきすぎて寒々と
焼き芋屋北風と一緒にやって来る

大阪市 吉 野 志 津
日めくりも薄さ目にたつ忙しさ
呼ばれてる後に可愛い先斗町

大阪市 松 岡 進
焼芋のおいのこして娘はおりる
金袋確かめてから酒をつぎ

鳥取県 福 田 陽 山

家も建てカーも持ったが火の車

鳥取市 藤本和宏

ライバルに不意を突かれた日のショック

兵庫県 高橋近江

口笛で人妻三度目振り向かず

守口市 池川伸子

おじいちゃんもだんだんなれた生野菜

守口市 北田竜子

何気なく言った言葉を誤解され

鳥取市 佐々木静泉

式からの帰りルールのまま走り

大阪市 内藤ますえ

列島は黒い票から大掃除

大阪市 花田繁子

人の計にたった一日ふりかえり

大阪市 広畑賛平

故郷に少年の日の形ちなし

大阪市 村島秀村

日本語へたな私も日本人

大阪市 須浦つね

顔は似ず声そっくりに母心

大阪市 木村濁水

人生の下足番でも満足し

大阪市 今井隼人

美食する猫は鼠の味知らず

大阪市 鈴木生仏

孫までが投票に行く年に成り

柳舌

路郎選を離れていらい、はなはだしく変化したものに名詞止めが激増したことである。たとえば「谷のぞく」という下五を「のぞく谷」と止めたがるようである。短詩形の場合は余韻というものが生命であり、なるべく漢字でプツつり切ってしまふより「かな」で流がしたほうが詩情が出るようにおもう。路郎選の「真珠句抄」二一五句から漢字の名詞止めは僅か二句よりないことも何かの参考にしてほしい。(F)

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

若本多久志

銀ねずの小紋が似合う日蔭の身

関 美子

「佳人薄命」という言葉もあって、とかく清楚で美しい婦人にこうした宿命の人が多い。人生哀感の詠嘆詩？。

二ニンガ四の夫で出世に遠くおり

嘉 数 千代香

妻から夫をみた場合、又夫から妻をみた場合、そこに何か一つ欠けているものがあつてこそ、尊い夫婦愛が生れるのではないか。

Uターン出来ぬ余生を温める

榎 谷 一 葉

余生という文字から、句主の年頃を拝察して、その心境がよく詠まれていると思う。

風紋をえがき抵抗なき砂丘

東 原 福 子

数々の哀話を秘めた砂丘の歴史、そこに感じるいろいろな人間の喜怒哀楽から、人生を考えられる人は尊くも又幸福である。

身に憶えあるから娘問い詰める

ふきあげ 虎城

原句から、てにおは一字を削り、句意を強くして鑑賞させて頂いた。

母の袂を持っているという安堵

垂 井 千鶴子

忙しい主婦の日常の中にも、こうした尊い句想が多くあるのに見過ごされている。想いやりの深い母性句として光った作品。

余命まだ残して落葉散りいそぐ

増 田 めぐみ

ただ単なる感傷句として、見過ごすには惜しい深味を持った句だと思ふ。

亡き妻に留守をたのんで鍵をかけ

大 原 葉 香

妻に先立たれた逆縁の悲嘆を、下五に強めた技法を高く評価したい。

浸水の二度目見舞の客も無く

樋 口 一 峯

初歩的な句であるが、川柳の原点というふうなものを、正しく踏んでおられる処に敬意を表したい。一層の精進を祈念申しあげる。

鑑賞洩れの句を左記します。

官僚の鑑ちらつく酒宴なり

葉 香

天辺の熟柿は島にやるかしら

シ ゲ

形見分け袖から明治の札が出る
東西屋と隣り合せたラッシュアワー

鹿の子
千 歩
露 芳

版 上 十止庵

シュールベルトいつかコーヒがさめている
すらすらと詠まれた句のようであるが、偉大な音楽の余韻がうかがえる秀作といえよう。

シャム猫の恋路に邪魔な血統書

光 武 弦太朗

動物愛護者といわれる人間の一面にも、こうしたエゴイズムが隠されていることを、鋭くついた秀句。

禁酒まだ知らぬ飲み屋の年賀状

中 谷 利 美

飲み屋からの年賀状を手にして、いささか未練の情を噛みしめながら、禁酒の誓いがほんものになかっことへの、自省句？。

生駒から

不二田一三夫宛

麻生 葭乃

「川柳師走の顔」を拝見して、これはとても時間のかかる仕事だと思いました。ジックリ句を味いながら探してはもらえませんが、歳暮とか十二月とか大晦日とか年の瀬とかいう字をすばやくキヤッチするような見方をせねばなりません。よりぬいた句はさらに句の質によって拾うてゆかねばなりません。私もいつだったか忘れましたが「なにわ」誌で十二月という題を出したことがあります。その例句に、「川柳雑誌」からより抜いたことがあります。私の手許には「川柳雑誌」がわずかしきありません。みんな中央図書館へ寄附しましたからです。それでも次の数句を拾いました。

縫いに出ず晴着へコネの要る師走 好祐
十二月八日の日本は強かった 涼 髪
十二月遺憾ながらと返事が来 花 村
大売出しの音として聞くジングルベル 鮎 子

十二月鶏もかすれた声で鳴き 昭
この時なにわ投句家で秀逸入選者の句は、 大
じりじりと師走の逃げ場狭くなり 子

宮原兼二
(評) 事始めから一家の主婦はそろそろ忙しくなってくる。暮れの訪問は遠慮するのが常識であるとなると、大節季の債鬼を逃げる術は寄席、映画、パチンコ屋とふところの採めるのが残っているだけである。運転という題の秀逸入選者は、

観光バス客の余興を背で聞き 藤本 明

(評) 綺麗どころのグループか芸能に志す人達の貸切車であろう。一杯きげんも手伝って次々と自慢の声がゆさぶって行く車は花が咲いたようである。

助手席の口がうるさい初運転 木村 保

(評) 交通のルールは心得ていても、初めて都心へ出たとなると助手席の先輩はだまってはいられぬところ。

かように色々な方法を考えて作句に興味を持たすようにしむけています。ですから句の鑑賞などもなるべく専門語を使わず、うまい句を抜擢して川柳は如何に解釈し如何に句意を受け入れる可きかに重点を置いて平易なこ

とばで説明しています。

(中略)

秀句抄に三井酔夢さんの句が出てましたが、この人は大胆な表現をする人です。それがこの人の特徴かも知れません。

「なにわ」柳壇正月の題は、「酒」「君が代」です。題には困ります。ハイウェーだのガードマンのたいがい作りよい題を出すのですが、身辺句があるので、警察用語も知らねばなりません。

(後略)

若本真彦 (多久志) 著

「凡愚のたわごと」

頒 価 六〇〇円
送 料 一〇〇円

西宮ここにも松下幸之助 (菊沢小松園)

氏の五冊目の著書である。その生い立ちから社長業に今なお活躍中のファイターが、自信をもってあらわした好著である。ぼくは柳人の書いた随筆はあまり読まないことにしている。というのは、プロが書いても随筆のおもしろいのは実にすくないからだ。それがこの「凡愚のたわごと」だけは、タバコ一本すわすわ一っ気に読んでしまった。(不二田一三夫)

▼川柳塔本社でもお取り次ぎいたします。

「川柳年鑑」

ぶつちやけ嘶

池口呑歩

雄山閣刊「川柳年鑑」昭和四十八年度版の編集を、先日やつと終った。

心地よき疲れなるかな。息もつかず

仕事をしたる。後のこの疲れ

といった啄木の歌の心境と言いたいところだが、それもほんの東の間のこと、とにかく問題があまりにも多過ぎるので、とてもことに心休まる暇がないというのが、実は正直な私達の昨今なのである。

その難しさは、初めから覚悟したことではあったが、まさに想像以上である。

大方諸賢の御理解御支援をいただくため、問題をここに列記して解明してみたくしても原稿用紙百枚を費したところで恐らくそれは充分とはなり得ないだろう。何かとつものな巨大なものに刃向う蟻蟻の斧のような悲壯感無常感を思い知らされるのだが、お互い浅学卑才、微力不肖ばかりを愧じてはおられない、ここで刀折れ矢尽きては元も子もなくしてしまいそうだからである。

現在のこの川柳界のために、何百万円も投

資してやろうという奇特な人は、そうザラにはいないようだし、また、今後も容易に得られそうもないだろうということになる、ここはどうでも石にかじりついても成果あらしめねばならないと思われ、その成否如何が、また、雄山閣をして「川柳綜合誌」の刊行へ踏みきらせるかどうかのキイ・ポイントでもある、となると、私達としては生半可なことで尻古垂れてはおられないように思われなければならないのである。

私達としては、たまたまそのようなチャンスに恵まれ、ゆきがかり上その編集のお手伝いをさせていただくことになったが、勿論それは、私達グループで私物化されるものではなく、対社会的、対文芸的ということももちろん、あくまでも「川柳人による、川柳のため、川柳の川柳年鑑」として、広く大方諸賢の御意見御希望を聞き、反映結実せしめた年鑑にしなければならぬだろう。

だが、しかし、それを言うは易く行うは難しである。一口に大方諸賢の御意見御希望を聞くとは言っても、それは実に千差万別であり、伝統、革新、中道その他各派が麻の如く入り乱れている川柳界の現状では、それらの総べての方々に御満足いただけるような年鑑など、誰がやってもまず絶対に出来っこはないだろう。

従って私達としては、お互いの主観をまじえず、あくまでも謙虚に、伝統は伝統の、革新は革新の、現在ありのままの姿を正確にお

伝えするようにしなければならぬ、と、編集委員一同大いに心し戒めあつて努力しているのだが、それでもまだ見る人見る目で不平不満の種は尽きそうもなく、多くの苦情殺到に悩まされる有様である。

もっとも、そうした苦情批判より、激励賞讃の方が、パーセンテージにおいて比較にならぬほど多いことは言うまでもなく、やはり「よくぞ出してくれた、」の声が圧倒的なのだから、私達としても大いに意を強くさせられ、更に第二集、第三集へと意欲闘志をふるい起させられてゐるわけである。

さて、そこで、冒頭にも述べたように、問題全般に亘つて書くには紙数がないので、「作品」について問題になっている点の幾つかを、作品部門担当の委員として解明してみたいと思う。今日ここに、本誌のこの貴重な誌面を、拝借させていただくのは申し訳ないが、以上何分御賢察の上、御理解御支援を願えれば幸いである。

「作品」部門で今一番問題になっているのは、「句数割り当て制」の問題である。即ち、第一集、第二集とも、お寄せいただいた調査票に基き、その同人数に応じて、例えば同人が三十人なら十人、六十人なら二十人、九十人なら百人程度なら三十人というような配分をお願いしているわけだが、編集部の方では事務的にそうした配分が出来るとして、配分される吟社の方では、なかなかそう

簡単に割りきれられるものではないだろう。

配分數内に入って出句出来る人達は問題ないかも知れないが、例えば、同人数が三十人で十人出句の割り当てがきた吟社の場合、十人目、十二人目などをどうするかは大いに問題になることだろう。時には、年鑑に出させたいと思わなかったで、吟社内に変な対立感情を惹起しないとも限らない、それが原因で分裂解散などということも起りかねないから、これはよく考えねばならないところだが、かと言ってよく考えねばならないところの妙手妙案も現在の、これをカバーするほどの妙手妙案もないのである。

勿論、私達としては、何万人いるか知らないが、自称他称に拘らず川柳人である以上、一人も残さずこの年鑑に収録させていたが、真に実のあるものにしたいと念願はしているが、御存知のようにこの年鑑は作品だけの年鑑ではない、限られた頁数の中に、評論があり、柳界概況があり、その他の記録があるのだから、作品もまた相應のスペースで我慢するより仕方がないのである。もし、こうした制約をせず、全国の結社所属同人の全部の作品を収録したら、恐らくそれは一万句以上になるのではないだろうか、とすると、全体で五百頁を越す大冊になりそうである。しかし、それとも、出せば間違いないと売れるものなら、五百頁だろうが一千万頁だろうが問題ではないが、残念ながらその保証は何一つないのである。雄山閣とて伊達や酔狂でこんなことをしているのではないし、私達としても損とわかつたことはさせられない。

だから、多少の矛盾や不合理があることはわかっていても、万止むを得ずそうせざるを得ないのである。つまりそれは、田中総理の「日本列島改造論」に対する世間の批判に「この論がベストではなくてもベターであれば、他に妙手妙案がない以上、この論を推進してみる以外はない」

という二階堂官房長官の答えに似ている、別に政治家の真似をするつもりはないが、現実がどう足掻いてもそうならざるを得ないのである。もし、こうした事情を充分御賢察の上で妙手妙案があったら、どうか御遠慮なく編集部へお寄せいただきたい、第三集以降に検討採用させていただくことに私達は毫も吝かでないつもりである。

とにかくそんな訳で、私達はこの年鑑の売れゆきその他状況を判断した上で、十人割り当てのところを、十五人から二十人、更には二十五人、三十人と徐々に御期待御希望に添えるよう努力するしかない、というのが現状なのである。

× × ×

作品だけをとってみても問題はまだまだ多い。例えば、資料として提出されたからといって、作品全部をミソもクソも一緒のように年鑑に発表してよいものかどうか、作句者側としては勿論全部を発表してもらいたいかも知れないが、それでは川柳の質の低下か天下に公表するようなことにはなりはしないか、やはり何等かの機関を設けて、しかるべき選択の必要がありはしないか、もし、そうすると

すれば、ではどういうふうにしてその機関をつくるか、何しる規模は全国的スケールをもつたもので、各派各グループが入り乱れているのである、これを一体一夕に答えが出されるような生易しいものではないのである。長くなるのでこのへんでこの稿を結ばせていただくが、以上のことから一党一派に偏せず、

川柳の大局的な視野観点から適切な御指導御鞭撻が願えれば幸いと思う私達なのである。
(現代川柳研究会主幹・前老人ホーム聖明園川柳会講師)

★

雄山閣編

川柳年鑑

昭和48年度

A5上製 一五〇〇円 千一五〇円

川柳発生の技法分析。現代の川柳創作上の伝統と革新の系譜、本質を抉る画期的評論や現代川柳人の作品集から、評論、作品、全国柳社一覽、柳界概況、句碑、刊行物、マスコミ柳壇、柳社柳誌索引など、川柳人必読の書。

東京都千代田区富士見二の六

雄山閣出版

(筆者からいろいろ編集上の意見を個人的にうけたり、雄山閣からもわざわざ東京から自宅へ電話で原稿の再確認を求められたりした。この熱意だけでも前刊より好評であることはまちがいない。)

(F)

路郎選『真珠句抄』私感

不二田一三夫

故路郎先生の数ある著書の中でも、不朽の名著といわれる「川柳とは何か」（昭和三十年十一月東京至文堂発行）は残念ながら絶版となっている。

ここに掲げる句は、昭和三十四年に刊行された「新川柳鑑賞」の付録「真珠句抄」として「川柳とは何か」からのアンコール作品である。注目してほしいのは、誰にでもわかる句がならんでいることである。

「川柳雑誌」を改題して足かけ八年。川柳愛好者もかわっているが、流行病のように、革新熱にうなされていく人をそこに見受ける。古いカラから抜け出すことは柳界だけの問題ではないし、ただ古きを守れというのではないが、川柳塔には川柳塔の句がある。それがこの「真珠句抄」であるといいたいのである。

むずかしい文字を書くと言われたのはむかし、今は読みやすい文字を書く人が物知りとなっている。だから辞書を二冊も用意しないと読めないような句はすこしも新しくはない、とばくはおもっている。作品の思

想を追求せず外見の文字だけで古いの新しいのというのはナンセンスだ。

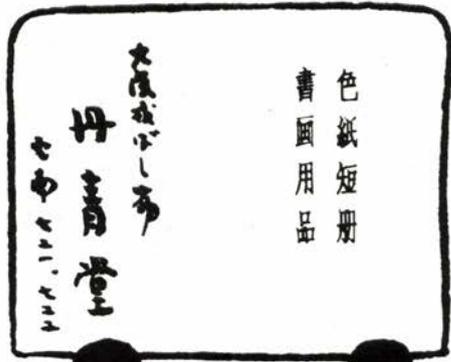
路郎先生が「短冊に書けるような句を」といわれたのは、これから川柳をはじめの人に川柳を曲解してもらってはこまるという教えであって、十年二十年川柳している人が今だにそれを金科玉条として守っているのはどうかとおもう。交通事故や公害などにおびやかされている今の世に生をうけて、なにもかも美的に表現するというのはウソの文学になるのではないか。

ここ四、五年、外見のキレイな句が目立ってふえてきたことは、女性川柳愛好者がふえたことに起因しているようにおもう。たとえば「花」が、どうの、こうのというのが雑詠らんをにぎわしているのはご承知のとおりである。一短冊に書けるような句を、という教訓がここにはらんしているようである。

「真珠句抄」には、生ま生ましい人間像がずらりならんでいる。このところをじっくり味わっていただきたい。

脱路郎川柳も、新しい前進にはちがいない

色紙短冊
書風用品



が、路郎選にはユーモア味のある句が目立って、そこに川柳の主流のようなものを感じるのはほくだけだろうか。

新人によく本を貸してあげるが、「川柳とは何か」が一番うけている。そんなわけで、まだ読んでいない人のために、「真珠句抄」を再録することにしたのである。

「真珠句抄」

腐るからこれも喰べとく肥りよう
辛うじて住む東京をうらやまれ

中 陰

亡き母の煙管を持てば語り居り
扇風機の代りを妻がまだつとめ
名曲か知らねど夜業腹が立ち

梨 星
白 星
鉄 洲
没 食子
無 鬼

檀家から帰る尼僧は梅を持ち
 草月流缺だけでは手におえず
 だが君 蜘蛛の努力も学ぶべし
 金のない明治生は放つとかべし
 春だそれ 記者は動物園へ飛び
 ばいばいのとても上手な二号の子
 置き去りの米にポリスの非力なり
 男臭い部屋ねと窓を開けられる
 酔っぱらって殴って欲しい時もあり
 大往生とは弟子達の作り事
 大工には素直に動く鋸であり
 角帯のことも株式会社銀なり
 銀行の門灯 やもみが来る暑さ
 底にたまった牛乳を勿体なしと見る
 ぞあますで受けられ舌がもつれかけ
 一周忌遠慮さしたい女が来
 悪銭が身につき板につく名士
 新課長机の位置を変えただけ
 ハテ誰の忘れのかと煽いでみ
 税務署と云えばシャックリ止まったり
 吉田さん三振しても引っ込まず
 間違いなやと宿題母にさし
 肺活量負けずぎらいが二度も吹き
 宿題の此の辺までは母も出来
 二階から冬をみているふところ手
 タチツテ入歯ははずせばダヂツデド
 新築へもう天皇の額かけず
 不纏綴の方へ初めは親しくし
 虚子の名もしらない胸の議員章
 先妻の子に学問が出来すぎる
 葬儀の短かさ犬もついで行き

稔 一 久 子 粗 影 組 水 野 南 圃 枝 郎 麦 太 楼 ひ か 平 牛 耕 介 削 平 侃 流 洞 巷 潤 紫 香 水 客 茶 々 文 蝶 沐 天 梵 鐘 豆 秋 花 村 さ ぎ ず 牛 歩 夏 六 文 二 郎 惠 一 郷 方 大 正 郎 玲 人 粗 影

働いて取れと資本家折れ合わず
 子猫ぞろぞろみな宿命の顔かたち
 お祈りする黒髪の長さかな
 更年期内科外科歯科忙しい
 音のよいおなら乳呑む児も笑い
 天誅か税吏が酔って川に落ち
 終電を気にして料理残して来
 腹が見えるよ栝榴かげんしな
 出しやばりが爛のぬるさを云いにくる
 大空の下チヨボチヨボと人の住む
 屈辱を耐えるこめかみ脈を打ち
 昼風呂へ切腹するよに坐り込み
 正直にはなし借金ことわられ
 亭主もう黙って針を拾うなり
 ハゲぐらい嫁きます別荘自家用車
 芝居ではあろうが家出はとけず
 すかしては注ぎすかしては注ぐ一人旅
 近い合いして愛情を交換し
 近道はよそうに父の老を知り
 ハウマツチ指四五本で答えたり
 みの虫のなんぼ匂うても壁だった
 道とえば嫁にもほしい教えよう
 税務署が居るのに電話またかかり
 貧乏はいとませんと云うたけど
 未亡人読めない本を売りもせず
 いい仲と知らず間へ席をとり
 向う向く娘財布を明けており
 親世音甘えてみたい御姿
 一同の寸志汚ない紙幣ばかり
 女なる悲しみおんな酌をする
 私もその鳥合の一人賛成す

文 蝶 生 々 庵 春 巢 滿 果 濟 花 醉 月 草 右 朗 笑 牛 夢 海 夢 妄 夢 無 聖 快 夢 起 桑 南 史 球 芳 泉 孤 浪 美 秋 孤 浪 不 二 豆 秋 月 都 無 骨 良 々 草 荘 柳 堂 穂 波 子 文 庫 梨 里 翠 光

最後まで予算がないで押すつもり
 泣いたのは他所の手針を持ち直し
 日向水のような相手でくたびれる
 足の裏猫といっしょに叱られる
 着たままでボタンつけるもベタハーフ
 背負い投げするように母は子をおろし
 御免ねといって仲よし先に嫁き
 御祈禱をパーマの上にして貰い
 母と云う乏しき髪に油さき
 接吻をしてと子供はもう五つ
 帰化しても唄は二上三下り
 手作りの胡瓜はつむじ曲りなり
 奢られる弱き奴が好きといひ
 三等がよいとおふくる困らせる
 取るものは取って信仰足りません
 押入のついでに拭きたかった肺
 三べんに区切ったあくび母も老け
 水貰うだけに女の暇が要り

湖 月 茶 々 五 醉 滿 年 草 右 花 村 ひ か る 宵 明 草 一 郎 草 一 郎 草 右 多 久 志 芳 泉 山 雨 楼 幽 王 月 仙

黄銅六角ボルトナット
 及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所 会社

大阪市天王寺区空堀町八番地
 TEL 側 三四五二一四
 夜間 側 四四〇八

一分間の柳論

谷垣 史好

僕にとつて川柳とは何だろう。「遊び」だといえは不真面目にすぎよう。しかし正直いって、心情的には「遊び」としかいえない。だから、川柳は人間陶冶の詩である。などと大上段にふりかぶられると当惑してしまうのだ。陶冶というと、戦中派の僕は、つい修身を思い出す。路郎師は決してそんな意味で使われたのではあるまい。だが師の没後、金科玉条のごとく引用されているうちに、この言葉には、何だか

修身の色合いが濃くなってきたような気がしてならない。

このごろ、川柳は衰弱したという説があるが、それも、ひよっとすると、このようなストイックな川柳観とかかわりがあるのではないかと考える。

楠本憲吉氏は、俳句の精神とは「まこと」と「遊び」の奇しき兼ね合い、それ以外の何物でもない」と云っている。川柳にとつても味わうべき言葉ではあるまいか。

子沢山ニツクネームで母も呼び
水族館食気放れて見て通り
舌を出す癖は娘のときのままだ
ヤットコシヨ云えば女中が笑いこけ
素うどんへくったくのない子が並び
名刺には社長あれあれ掃除もし
蓄めようとすれば花咲き鳥歌い
故郷へも寄れと社長の暖かし
悲しみを蛙ケロケロとしか鳴かず
素人のなすびは十一月もなり
もう踏まぬ故郷ぞ柿へ肥えをやる
その上によその子までが来て遊び
二十五でもう税務吏は家を建て
残業に酒が出るのとつねられる
われ老いぬ子故の詐欺に二度も遇い
締めたろと見たら卵を生んでいた
オイ風邪をひくぜと男から折れる
気前よく腹の痛まぬビール抜く
もう少し寝てと食事準備中
お父さんのようになるとはいじらしい
床の上で散るとは花も知らなんだ
早よう去んで欲しい火鉢へ鍔をさし
約束を破らすような雨が降り
もの足りぬ夫事業の虫のよう
手紙では届くも本社が見当ず
It is だけで世界を回つて来
我が町の昼を知らない労働者
意見して帰れば妻に意見され
金策の急がば回れ暮に坐り
ばらばらの高級品で身を飾り
泥棒の逃げた窓から首を出し

玉瓢 水客 千容 いさむ 摩天郎 ただみ ささす 野甫 春果 自由朗 日満子 香林 四季無 表情 尋四 伍健 梅里 日満子 淡舟 宏方 照子 季賛 草一郎 井蛙 井泉子 玲人 夜潮 齊花 水客 小松園

支那服を着て出る妻はまだ若し
まないたは白く乾いて妻の留守
女房もう先に寝るのも憚らず
エレベーター押し込められてお辞儀され
見て見ないふりして同職見て通り
惚れた弱味彼女の連れのまで払い
五尺八寸二つに折った御挨拶
鏡台を並べてみんな不倅せ
父親の只居るだけの看護なり
神経の太い妻なり戸も締めず
洗濯機今年も話だけで暮れ
停年も近くちぎった煙草喫う
療養所汽車から見ればいれたり
恋人がいるのに嫁げへんか嫁げへんか

人間が真つ正直ですぐ怒り

美笑 吞水 鉄洲 花村 卯之助 素身郎 白水 白星 淡舟 いわを 文夫 澄泉 摩天郎 法泉子 水車

パンガローへ来ても女は洗濯し
すす原園児が通る声がする
急逝へ飲んだ思い出ばかりなり
職場大会齋を食った息で来る
マネキンと同じ柄だが見てくれず
現実にかえて女米をとぎ
喪服まで借りて来たのにもち直し
峠茶屋一団去ったごみを掃き
読みながら十代ジャズも聞いて居り
力つきたように冬の日海へ落ち
女手の家で汚い硯箱
前借で来た娘邪慳に父と会い
御苦労なこっちゃとスキー見送られ
お喋りしてきた来た話題ごとと変え
足らぬとこだけ奥さんが口を入れ
窓あけて家主眺めも買わせる気
斜陽族さすが式辞の堂に入り

鳥取砂丘

竹莊 方大 春果 不水 井蛙 水客 一三夫 緑雨 八ツ茶 一夫 京一樓 白星 修 一善 香林 美秋

はるかなる砂丘は独り歩くべし
水道の漏りもよう直さぬ亭主
さあつて市場の口でとらえられ
席談つてやったのに講談本を読み
使い込みをさせた女はけろりとし
若御家の喪服一番よく似合い
甘党は女の方の中に居り
好きと好きならばと母が先ず折れる
矢印の通りに曲がるモーニング
二つ頼めば一つ忘れる付添婦
楽天家のクラゲは磯に置き去られ
大学へやれば酒飲むようになり
左手でよかつたねえと怪我見舞
旅楽し前も隣りも女性です
あきまへんなどと菅屋へ居を構え
街録の妻の鼻息まできこえ
お年玉貰えば子供去ぬといふ
二号の眼には三号の自由奔放さ

一分間の柳論

見よう見真似で入った川柳の道、初めた
頃は句を作る楽しさに嬉々としていたが、
次第にけわしい山道にさしかかったよう
である。
いつまでも日常茶飯事をうたい、実感句
の重みに溺れていていいのだろうか。と。
近頃は、いろいろな川柳の亡霊にとりつ
かれ、私のパレットは多彩。これをどう溶
かし合せて、自分の色を出すべきかと悩
み果てしない。夜を徹して立派な柳論に共
感、感動し、朝に至って、これが選挙公報

八歩 春巢 千代香 香林 緑風子 紫香 美笑 草一郎 三司 甲馬 一瓢 卜占 佩流洞 方大 水堂 ひか平 愛論 谷水

飲むだけは飲みお土産はもぐさにし
波の音海もなかなかな音楽家
半生はゴムで消したいことばかり
代表におされて妻に叱られる
暫多町生る
合併に山紫水明考えず
手袋の脱ぎすてられしぶきみさよ
皆寝かしても女には用があり
機関車も一人で走って見たかろう
質屋を出れば今日は満月
ピース 光 新生 目下バット党
天人のように愛人去ってゆき
付添の診断正露丸をくれ
予算こことと工事ほつとかれ
下戸の酌まということを考えず
外套が左前だけ女なり
献盃の膝を正して順を待ち
しなびても土筆は袴つけていた

博人 宏甫 野方 竹莊 灯竿 翻骨 愛論 豆秋 野甫 秀敏 甲馬 澄泉 矢寸志 孤浪 一井 瓢蛙

三井 醉夢

の空しさに似た失望に変わったたり、亡霊と
の戦いはまだまだ続きそうである。
十七文字の定型を守り
出来るだけ平易な表現で
豊かな诗情がそこはかとなく漂い
個性が朝露のようにさわやかに光り
ひとりよがりでない伝達性を持つ……e t
c…… 書き出してみると生彩を欠く上
に欲張っている私のプラカード。もう少し時
を下さい。

誰の着たでてらか余香拝すなり
娘ばかりになればおい君なんだ君
ぼうふらは皆蚊になれり失業苦
その割に葬儀屋自宅から出さず
スキーでもするさと左遷うそふいた
はしやいだあとと淋しき妓にも
子の作文それからそれからで綴られる
石橋を叩いて恋に見放され
野球見るのに会社までだまし
もう一つ蚊取線香をたくへボ基
買収はされぬつもりを箸をとり
みおつくし大人が聞けばまだ十時
退職金の端数が飲め飲め飲めという
秋来ぬとさだかに見えてまだ裸
これはまあと母を笑わす綴り方
アプレだと見たかビールにさそてくれ
同窓会女優がいつち羨まれ
入選のコントが仕事嫌いにし
基地話かるくいなしでパトロール
搾取される事に膝まで泥々だ
痛いところだらけ五十のスキーヤー
年寄のライスカレーを汚ながら
仏陀より今なでている女の手
邪魔くさい返事をすればいい話
窮乏しや胎児諸共食われたり
をんなみたいいねと女らはさげすみぬ
背の子と一つ違いで歩かされ
受付はいと明瞭に恩を売り
親切な調査は地理を知って居す
柔道の帯を風呂屋へしめてくる
弱い者元利の外に何か添え

白猫児 牛耕 芳仙 花村 谷水 梨里 日満 方大 多志 鬼醉 野甫 静観堂 伍健 草一郎 文庫 博 乱取 貴志子 規堂 公二 一瓢 花情 ライト 雨三 光路 草明

肩凝り

吉原紅月選

肩凝りをゴルフのせいにしサウナ
あんま呼び呼び麻雀やめられず
パチンコで負けた肩知らず揉む
肩の凝る 話師 走に 持ち込まれ
仲人の 大役 果たし 肩が凝り
優勝を 賭けた 土俵へ 肩が凝り
初めての 空の 旅して 肩凝らし
肩凝りへ 母はやっぱり 灸をすえ
教養の 違う 言葉へ 肩が凝り
肩凝りへ 釣が 崇ったとは 言えず
年甲斐も ない凝り性の 肩へくる
借金の 相談 受けて 肩が凝り
十円では 孫も 按摩を してくれず
療養は 寝てる だけでも 肩が凝り
お駄賃で 済む肩 叩きたより ない
冗談も 言えぬ お客へ 肩が凝り
肩の凝り 年じやと云えば おママ
ひとり 居て やたらに 肩の凝る 寒さ
あんま器を ぎが 肩凝り 放つと
更年期で っせと 肩凝り あしらわれ
親馬鹿の 欲へ 仲人 肩が凝り

輝親 翁童 翠月 静泉 国彦 悠泉 肖二 惠子 昌道 古心 軒太楼 七面山 どんたく 和宏 智司 英子 不醉 旭童 可住 洋々 弘朗
歩き初めた子の守役で 肩が凝り
肩凝りに 按摩の 笛がよく 響き
洒落一つ 解せぬ 課長で 肩が凝り
女から 凝肩り 訴えられた だけ
肩叩く 孫の 力が もう 痛い
判を押す だけの 課長も 肩が凝り
初産の 乳が 張ってる 肩が凝り
寄付金の 話で 師走 肩が凝り
税務署と 聞いた だけで 肩が凝り
入知恵へ 袂の 外は 肩が凝り
ほほえまし 肩揉み 合うて いる 夫婦
里帰り 娘の 肩を 揉んで やり
年賀状 書き 上げた 夜の 肩が凝り
肩凝りへ 黙って サロンパスを 貼る
聞かされる 祝詞めで たく 肩が凝り
贅沢な 肩凝りも あり 旅 疲れ
しまい 湯につち ほぐした 肩の 凝り
癖の ピラ みたい 肩凝る 人の 背
生真面目に 生きて 年中 肩凝らせ
孫を 背に 乗せて 楽しい 肩が凝り
税金を はしく 算盤 肩が凝り

英詩 藤持 春日 曉明 本蔭棒 ろ亭 里風 秋月 木魚 白水 章雅 カズエ 綾女 古方 千翁 肖二 佳女 杜月 白汀 扇水 不二 素身郎 杜月 一郎 松花 陽山
肩の凝ることを 老人 きたが かり 十止庵
人 肩の凝る 妻 編棒を 叱られる 思月
天 投票日 候補者 家で 肩を 揉み どんたく
軸 モーニング 着て 職人の 肩が凝り
プロパン
マンシヨンの プロパン 行儀を 並び
都市ガスの 台所 あり プロパン 屋 貞祐
プロパン 店に 勤め 家では 薪を たき 七面山
プロパン へ 明治 生れ も やつと 馴れ 本蔭棒
プロパン に 町の 炭屋 が 転 向し 逸名
プロパン で 僕にも 出来る 目玉 やき 和宏
プロパン の 後へ 車間 距離を とり 可住
プロパン が 切も 追いか 出来ぬ 風呂 翁童
プロパン が 中途で 切れた 飯の 味 里風
新興地 プロパン ガスが あてに され 度
コンピナート 名 プロパン が 燃も 古方
プロパン より やつぱり 薪で 炊た 飯 どんたく
妻の 留守 プロパン ガスに 驚か され 貞男
プロパン の 元 確か める 妻の 留守 バット

安平次弘道選

プロパンになつても変らぬ母の味 重人
 マナ板のリズムプロパンいい調子 恵子
 プロパンも充たしくつろぐ大晦日 扇水
 も野焼き農家もプロパンガスに馴れ 章雅
 プロパンは嫌な匂いで洩れを告げ 輝親
 プロパンも借りて蒸の湯自炊する 伶人
 何も彼もプロパン煙突など要らず 七面山
 寝すごした朝へプロパンまが切れ 佳女
 プロパンにしてから朝寝の音が 恵子
 プロパンで団扇がいらぬ屋台店 国彦
 プロパンも積マイカーで行くキャンブ 悠泉
 事故ニュースも日のプロパン恐がらぬ 昌道
 プロパンを細めに餅の耳を焼き 代仕男
 民宿の裏にプロパンぬっと立ち 寿美子
 暴発のニュース元栓確かめる カスエ
 原因はプロパンむごいトップ記事 里風
 転がして 器用に運ぶプロパン屋 輝親
 薪割の斧 プロパンへ錆びたまま 暁明

佳

プロパンの置場に困る二階借り 英子
 半煮えのところでプロパン底をつき 本蔭棒
 ピクニックミニプロパンもお供も 昌道
 不発弾の様にプロパンのボンベ立ち どんたく
 プロパンで野戦料理のパンガロー 代仕男

人

プロパンの Cock 寝巻が確かめる 春日
 地
 プロパンのどこかが洩れても恐怖 里風

天
 プロパンが大役果し 聖火消え 寿美子
 軸
 プロパンで心中巻き添えくう隣り

下取り

小谷仙山選

下取り横目にたばこの輪をつくり 千翁
 下取り用の品をお隣りから貰い 七面山
 下取りの恥かしい程古い型 十止庵
 勿体を付けて下取り持つてかれ 本蔭棒
 下取りに魅せられ主婦は買い急ぎ 金太郎
 定年のもう下取りりもしてくれず どんたく
 D51は下取りされて人気あり 貞男
 下取りをして売上げがゲンと伸び 扇水
 下取りときまめたテレビが映り出し 木魚
 下取りは公正 価額が映り出し 寿美子
 下取りのミシン 結構服が縫え 寿美子
 下取りを中古で売って又儲け 恵子
 あてにした程に下取り見積らず 一朗
 売り付けて 儲け下取りでも 儲け 弘朗
 下取りを 済ませて 呉服屋改まり 白水
 下取りの話をすれば又動く 杜月
 隆子

下取りの裏に公害ゴミの山 秀峰
 下取りの張り値売り込む当が有り 代仕男
 値引きする 分だけ結局 下取られ 白汀
 下取を 邪魔くさがられ 断わられ 保夫
 下取りは使用に耐えぬわけてなし 昌道
 下取りの 破格新車に 背負わされ 昌道
 下取りの 値の良い方のテレビ買う 綾女
 下取りの 意外な類に 気が動く 暁明
 下取りは向うまかせの値で取られ 好一
 化粧して下取りポンプを売り付け 鎮也
 もう寿命ですね電気屋かつぎ出す カズエ
 下取りでも買わぬ品でも下取られ 好一
 下取りで 嘆いた土地が 金になり 古心
 下取りに 釣られて 買って又月賦 伶人
 下取りと見られたくない塗装する 和宏

佳

下取りに出すにはどれも未だ使え 松花
 下取りを出さずに出した程値切り 伶人
 顔しかめる程は下取り 損をせず 英詩
 新品はどうです 下取りいたします 亭
 売り込んだ品を下取りコキおろし 十止庵

人

下取りの 山を 税吏は見逃さず 白水
 地
 下取りにする ソロパンの音を聞く 千翁
 天
 下取りの値が取り替も気にさせる 魚山

初歩教室

—— 題「柱」 ——

本田 恵 二 朗

盛衰に耐えてゆるがず床柱

門柱のデカさに一寸反拗し

(門柱の豪華へ抵抗ふと感じ)

雄図ついに帆柱もろともくだけたり

(帆柱が折れて雄図を泡にする)

電柱の落選候補風泣き

(電柱の落選候補が風泣く)

門柱のしめなわも入れ写真とり

柱という課題を詠み込まねばならないので

こんな説明をしてしまった。こんな時は、こ

の課題吟に参加させる句にすることを止め

て、この句材をもっと練って、雑詠として成

功させて、句帖に書き残しておけば、日の目

を見る機もあらうし、勉強したことにもな

る。たとえば次の如くやってみるとよい。

(メ縄も入れて振袖写される)

炊事場の柱で煤ける火の用心

「火の用心」と特に「でかこまなくても、火の用心と書いた赤い札だ」ところは判る。

炊事場という文字に食われて表現がもの足りなくなつた。炊事場を厨と縮めた言葉にかえて見るのも句を練ることの一つである。

(火の用心厨の柱に無事煤け)

茶柱の知つたことではないお通夜

この調子だよ、中七が句を生かした。

氣を利かす時心得て床柱

(汐時と見て床柱如才なし)

床柱ほめた途端にお酒出る

とたんに酒が出たなど作り話みたいだ。

(床柱褒めたら一本追加され)

膝を交えて酌み交している歓談の中での、微笑ましい一と駒として表現した方がよい。一本追加といえ、何をだと言くのは野暮だ。

電柱に片足あげる犬を待つ

こうあからさまに言うてしまつては品がなくなつて、発表をためらわねばならなくなる

どうせ品の良い句材ではないが、せめて次の如くやつてもらいたいものだ。

(犬と散歩電柱にまた用が起き)

建売りの柱に節の多いこと

(建売りだなどと思わせる節の数)

説明で南天床柱と知る

説明句の見本である。ムード零の句である。

(南天ですよとご自慢の床柱)

(南天の柱を鼻にかけている)

観光課柱の傷で客を呼び

(ガイド嬢柱の傷へ目を集め)

朝ごはん茶柱立つ縁起よい

言いたいお気持ちはわかるが、なんともたどたどしい節回しだな。つまりモゲ節だ。

ますえ

つとむ

生 仏

(茶柱がけさの歩巾を軽うする) この木柱には使われず

まことに簡単である。立札の文句みたいだ。

(柱にはなれず年輪ばかりふえ)

家の柱なくして母は強くなり

(主柱を亡くしてからの母強く)

スポンサーにされるとも知らず床柱

霜柱さくさく新聞少年の朝

(朝刊の足へ霜柱が媚びる)

還暦を終えて息子を柱にし

(長男が柱に見える六十路坂)

倚りかかる柱の弱き身の置き場

(倚りかかる柱の弱さへ老いせまる)

霜柱早出の朝の靴の音

(霜柱早出の靴のリズミカル)

黒光りの柱旧家の人と生き

(十五代仕えて柱黒光る)

茶柱をみつめ恍惚ねと云われ

茶柱の茶碗うごかしそるとのむ

(茶柱を倒すまい唇の位置)

唇の位置に工夫する静観堂老の表情は正しく

愛すべきものがある。

見せかけの大黒柱でとかげなく

(見せかけの大黒柱でとかげんそん)

荷重なんか言わず柱は辛抱してる

(重いと云わず柱の八十年)

老いばれて一家の柱若くなり

(後を継ぐ柱の若さたのもしい)

柱かけ九十翁の筆のあと

つた子

シゲ

つね

重人

同

陽山

静子

カズエ

茂美

静観堂

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

(電柱の影がまたふえうっとしい)

一昔も前の柱時計が時を告げ

(柱時計よくぞ動いた半世紀)

土俵から四本柱も隠退し

(四本柱が消えて力士弱くなり)

夢でなく茶柱が立つも幸はこず

(茶柱が立ったがいついこと湧いてこず)

門柱へ新婚ですと新名札

(門柱の名刺が新婚ですと言ふ)

柱磨かけ替えておく大晦日

八当り茶柱までに腹を立て

進

濁水

藤持

好一

贊平

比呂路

真夜中の柱時計の音数え

欲求不満の猫め柱に爪を立て

床柱背に長老の長話

栄光へ妻は杖とも柱とも

たよりない柱妻子に支えられ

残されて知る影の添え柱

床柱の值うち知る人知らぬ人

目に見えぬ柱をたてて倚りかか

陽の当るまでが命の霜柱

正確な柱時計に見る家風

おそろおそろ頂くお茶に立つ柱

私がこの教室を担当してから早くも満四年

単人

茶坊

繁子

本蔭

翁童

貞祐

度

頼次

杜月

同

同

昭和四十七年度

本社句会ベストテン

——一三夫氏が連続トップ

谷垣史好

本社句会に三割打者は果しているか——こんな興味から、年間入選句数を集計した結果を昨年四月号に書きました。こんな記録にどんな意味があるのか、と疑問に思われる方もあるでしょうが、記録というものは、連続性のある一つの価値があるということで、また調べてみました。今回は公平を期するため、選者吟も加えました。

四十七年(一月〜十二月)本社句会入選句

のベストテンは次のとおりです。(三句以内
厳守から)

- ①不二田一三夫(八十一句) ②傍島静馬(八十句) ③垂井葵水(七十九句) ④本多柳志(六十六句) ⑤河内天笑(六十一句) ⑥西田柳宏子、小浜牧人(各五十九句) ⑦香川酔々(五十八句) ⑧菊沢小松園(五十六句) ⑩中川滋釜(五十五句)

前年は一三夫氏が独走でしたが、今回は、後半になって上位三氏がせり合い、十一月句会では一三夫氏と静馬氏の差は一句、静馬氏と葵水氏の差は二句という大接戦。そして十二月句会の成績を、締切に間に合わすため、編集部から、わざわざゲラ刷を送ってもらい、集計してみますと、最後の兼題「耐える」もあと二十句足らずというところで、遂に上位二者が同点になったのです。不謹慎なと、お叱りを受けるかもしれませ

を経過した。そして現在まで一七〇名の柳友と対決を楽しむという倅せを得た。私の遠慮ない言葉や粗雑な評へお叱りもないばかりか、素直にそれを受取って頂いてうれしく思っている。そろそろ交替期かと思ったりするが、アンコールの声が四方から聞えてくるので、五年目の勝負と思つて頑張ることにする。皆さんも鉢巻をしめ直して頑張つて欲しい。

題(光)——二月二十日締切(四月号発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井三五二七七一
本 田 恵二朗

んが、スコアラーとしては、やはり、いささか興奮します。結局、「耐えている男の眉は動かない」の一句で一三夫氏の連続トップが決まりました。

このベストテンを前年と比較してみますと生々庵主幹と花梢さんが落ち、代わりに牧人氏と滋雀氏が入っただけで顔ぶれは余り変わっていません。主幹も花梢さんも、ご多忙な身で句会出席が減ったことが原因かと思われます。やはり熱心に句会に出席する努力と、安定した作句力、この両方が揃わないとむずかしいということでしょう。

なお、天位入賞三回以上はつぎの方々です
▽五回 中島生々庵、菊沢小松園▽三回 藤岡花梢、河内天笑、西田柳宏子、正本水客、有信新之助、城一舟、竹中肖二、飯田悦郎、中島夢成、河股緑水、垂井葵水(敬称略)

大萬川柳

「一回」

入選発表

選者 川村好郎
投句総数 六百三十五句
入選 七十五句

一回の生を無意味に過す悔い
大阪 君子
藤井寺 吸江

一回目のデート歩巾が違いすぎ
大阪 阿茶

もう一回待ってと王将隅へ逃げ
倉敷 克枝

一回のあやまち妻の信ずる瞳
鳥根 明朗

一回からもうファイトだけは持ち
宝塚 静馬

ファミリールアンド一回乗せられない
大阪 滋雀

一回は善意にとつて見逃がされ
大阪 一栄

積立てのあと一回へ組むプラン
米子 千代

病みつきになる一回と思うてず
奈良 保夫

一回はただフレンドとして許し
鳥取 陽山

一回の失言溝を深く掘り
鳥取 陽山

一回で当選違反で引っぱられ
門真 鉄児

つまみ食い一回だけでは収まらず
大田 軒太楼

七転びあと一回をただ信じ
鳥根 みどり

いななきも知らず木馬の一回転
富田林 美代

一回で世間狭める黒い霧
堺 藤持

一回のミス前進の糧とする
倉敷 扇水

一回の面接本心見抜かれる
大阪 比呂路

一回で愛想がつきた酒の癖
倉敷 里風

一回でパスの免許で事故に泣き
平田 代仕男

一回目の仏の顔へまたすがり
豊中 寿美子

一回は若気の至りで事が済み
大和郡山 カツエ

一回だけ顔を立ててと拌まれる
岡山 七面山

一回の流転雨の桶狭間
大阪 あいき

一回のデートであっさり断られ
大阪 章雅

一回に男女を産んで何恥じる
大阪 貞祐

一回のえにし生涯胸に抱く
大阪 文秋

一回聞けばわかりきるとふてくされ
松原 史好

一回ですむ言訳けのくどいこと
東大阪 清人

一回戦だけは勝ちたい初出場
大阪 真砂

一回のつまずき人生塗りかえる
大阪 好一

一回一回初心に返りおごるまい
大阪 好一

一回は出さねばならぬと義理の顔
富田林 弥栄子

一回ですまされぬ払い悪い家
富田林 弥栄子

一年一回四季ふり返る土用干
倉敷 筒子

一回に賭けて男が目をとじる
倉敷 筒子

一回は死も覚悟した出世
大阪 之保

一回目質屋の前でする躊躇
大阪 柳志

一回の嘘が嘘生む破目となり
大阪 柳志

始末書を一ぺん書いてある弱味
神戸 どんたく

一回のキッスから加速度つき始め
神戸 どんたく

一回目のよもぎゼスチュアです見合い
倉敷 白水

一回も喋べらぬ胸に金バッジ
一回ですむお見合いに妬けてくる

富田林 花 梢

第一回卒業名簿にひとり生き

一回でタネ見抜かれている手品

一回一回ひとこまとなるデート

奈良 本蔭棒

掛金があと一回の貨幣価値

宣誓を残して一回戦で消え

一回の掛け捨てですむ安い義理

佳句

松江 鶴丸

男なら一回は脱サラ考える

富田林 花 梢

初めてのデート切り札を持って

泉天津 春 巳

やり直しきかぬ人生サイを振る

高根 芳 子

一回の過失未婚の母で生き

人生一回唯一筋の道を探る

運者 吟

一生にただ一回の今日を生く

昭和四十八年度

ベストテン(十二月現在)

一 太茂津

二 花 梢

四 五 富田林

二一 鶴丸

二〇 春 巳

一九 芳 子

一八 弘 生

一七 あいき

一六 文 秋

一五 どんたく

一四 清 人

一三 真 砂

一二 好 一

一一 弥栄子

一〇 筒 子

九 之 保

八 柳 志

和歌山 太茂津

足袋白くその一回に賭けて舞う

大阪 弘 生

一回のいのち流転の中にいる

大阪 阿 茶

一回ぐらい何よと離婚気にして

和歌山 太茂津

一回の花のいのちは四季に耐え

和歌山 太茂津

天ノ句

和歌山 太茂津

人生一回唯一筋の道を探る

運者 吟

一生にただ一回の今日を生く

昭和四十八年度

ベストテン(十二月現在)

一 太茂津

二 花 梢

四 五 富田林

二一 鶴丸

二〇 春 巳

一九 芳 子

一八 弘 生

一七 あいき

一六 文 秋

一五 どんたく

一四 清 人

一三 真 砂

一二 好 一

一一 弥栄子

一〇 筒 子

九 之 保

八 柳 志

七 白 水

六 史 好

五 文 助

四 阿 茶

三 本蔭棒

二 阿 茶

一 阿 茶

三〇 奈良

三〇 大阪

三〇 呉

二〇 松原

二〇 倉敷

二〇 大阪

二〇 大阪

二〇 大阪

二〇 倉敷

二〇 富田林

二〇 大阪

二〇 大阪

二〇 大阪

二〇 神戶

二〇 大阪

一、今回から佳句五句と限定せず

五句以上の場合もあり、五句以

下になる時もあることを御諒承

下さい。

一、投句先は川柳塔社でなく堺市

藤井一二三方大萬川柳係へ直接

をお願い致します。

(好)

昭和四十八年度第三回

「長男」五句以内

締切 二月二十日

第四回

「半日」五句以内

締切 三月二十日

投句先

〒593 堺市堀上緑町一の三の七

藤井一二三方

大萬川柳係

一分間の私論

児島与呂志

はじめて句会へ出席して、一回きりでこ
なくなる人、またはそのまゝ一生を川柳と共に
歩む人。こういう人たちに聞くと、誰も話
かけてくれず全没のまま消えてしまい、後者
の場合も全没だったが、そばに居る人がやさ

しく声をかけてくれたので次ぎの句会が楽し
かったという。

私にもそんな覚えがある。柳人が柳人を育
てないで誰が柳界をにぎわしてくれるのだ。
こんな思いが知らず知らず私を世話やきに
てしまったようである。

川柳によっていろいろな点で私の人生はプ
ラスになった。このよろこびを未知の人にも
分けてあげたい、そんな気持ちが私のポケッ
ト・マネーを川柳にささげ、柳友倍加運動に

いそしめるのであろう。
柳誌をのぼす原動力は読者をふやせば柳誌
はこの二倍にふくれあがる。こんな簡単なこ
とがなかなか実現しないのを残念にももって
いる。

私は川柳に金を使ったとき、本当に上手に
小づかいを使ったと思っている。
これからも新人の発掘に私はまっしぐらに
進むであろうし、そこに私の生き甲斐を見出
すであろうことを確信している。

柳界展望

(原稿締切毎月末)

有信新之助

日に開かれた。出席者が年々増加して主催側は大よここび。この日は毎年川柳塔社幹部が総出席するのが特色である。

▼川柳オーホック二百号記念企画で、北海道句集「凍原」B6三二頁価六百元送料七十円を発刊。北見局私書函第八二号句集「凍原」刊行係宛。

▼川柳塔社新年役員会が本年も一月二十二日六時半から心齋橋の大成閣で開催された。生々庵主幹以下みな元氣な顔がそろう。

▼「さっぽろ」の斎藤大雄氏が一九七二年北海道柳壇回顧録で、北海道川柳年度賞、「ぼぶら賞」「冬眠子賞」と主だった賞を一人占めした。斎藤正人氏(滝川市)のエネルギッシュな作句活動を賞賛している。

▼「こなゆき」二九〇号記念全国川柳作品誌上コンクール募集要領。雑誌未発表三句、用紙自由、コンクール応募作品、住所雅号明記、会員外五百円発表誌代含む。締切二月末日着下

▼第二〇回大萬川柳大会が、割烹大萬で二月二十八

▼「宮城野」十二月に三月号記念「優秀作家賞」作品入賞作家が発表され、関西では海士天樹(兵庫)桂ひろし、山本ひよこ(京都)の三氏が次点者九名の中に入った。

▼「川柳人」編集所宛先は〒228相模原市南台四の六の五と改正されている。

▼大陸柳壇回顧録を書いた宇和川木耳氏が昨年十月十一日亡くなられ、東野大八氏が「柳宴」十二月号で、氏との大陸での回想を書いて偲んでおられる。

▼岡田甫著「川柳東海道」下巻は(読売新聞社刊)三月ごろ発刊の予定。

▼第二十三回岸和田市民川柳大会が十月二十二日市民会館で開かれ、出席者八十四名投句者十四名を集めて盛会、市長賞を藤村メウ氏が獲得。

▼しんぐう吟社の「みかん」が十二月号で一周年を迎え、今後の発展が期待さ

れる。

▼「紋土」の年間総合成績で山田止水氏が一一八点で一位、十五位が六七・五であった。

▼第六回串かつ川柳大会が十月二十九日呉市総合福祉会館で開かれ、出席者百九十四名投句者四十四名を集めて盛会、知事杯は井上慶子氏が獲得。串かつ川柳年間賞の十三名中に森井善居、楳田英詩、生信笑子氏らが名を連ねている。

▼噴煙吟社の故大嶋濤明氏の遺句集「娘々廟」が刊行された。価千五百円送料共

▼862熊本市京塚本町五三の一七七谷虹棧橋方川柳噴煙吟社宛。振替熊本四七八五番

▼一九六〇年発足以来、「諷詩人」不定期刊三〇号が発行され、川柳の名称の廃棄を絶対必要と考え「諷詩」を称したが、その後既成俳句、川柳とは別個の新しいジャンルを創成を「諷詩」

に使命づけることに転化してきた。

▼水野たかを著川柳句集「髭とポスト」送料共五百円が、富山県滑川市開一〇五一、川柳えんびつ社から発行。ポストマンとして定年で局長生活と別れる機会

迎え、今後の発展が期待さ

れる。

▼「紋土」の年間総合成績

で山田止水氏が一一八点で

一位、十五位が六七・五で

あった。

▼第六回串かつ川柳大会が

十月二十九日呉市総合福祉

会館で開かれ、出席者百九

十四名投句者四十四名を集

めて盛会、知事杯は井上慶

子氏が獲得。串かつ川柳年

間賞の十三名中に森井善

居、楳田英詩、生信笑子氏

らが名を連ねている。

▼噴煙吟社の故大嶋濤明氏

の遺句集「娘々廟」が刊行

された。価千五百円送料共

▼862熊本市京塚本町五

三の一七七谷虹棧橋方川柳

噴煙吟社宛。振替熊本四七

八五番

▼一九六〇年発足以来、

「諷詩人」不定期刊三〇号

が発行され、川柳の名称の

廃棄を絶対必要と考え「諷

詩」を称したが、その後既

成俳句、川柳とは別個の新

ジャンルを創成を「諷詩」

に

使命づけることに転化し

てきた。

▼水野たかを著川柳句集

「髭とポスト」送料共五百

に本書を出したのだそうである。―書留の声に居留守が飛んで出る―たかを。

▼藤村涼子さん（ニューヨーク）から一三夫氏への年賀状によると、ここ二年ばかり軽いせんそくにかかっているの東京の令息が公害の中へ来るなというが、今年はずい訪日したいとのこと。

◇同人の動向◇

▼若本多久氏（西宮市）は一月十日朝八時四十分からのNHKテレビ「こんにちば奥さん」に左ききに出演。なお十年前前に不二田一三夫氏の漫才「左きき」がNHKから放送されたことがある。

▼川村好郎氏（高槻市）の「春雨に女房と濡れるあは

らしさ」がNHK「こんにちば奥さん」へ藤島茶六氏から紹介された。なお好郎氏は元旦から信貴山の旅館で、愛嬢ご夫婦やお孫さんらとすごされた。前号の「一分間の柳論」を読まれた霞乃先生から激励のおたよりがあった。霞乃先生も難解句には憂慮されている

▼浜田久米雄氏（岡山市）は国鉄OB会岡山地方本部会報へ「アメリカの旅」を執筆。

▼奥谷弘朗氏（倉吉市）は倉吉新聞で「打吹川柳」の選者として活躍されているが「悪い政治家をだれが選んだ」を執筆。

▼梅谿庵不醉氏（姫路市）は関西税理士会々報へ「日給三十五銭から」税務畑

一代記」国立公園室津ご案内」など観光誘致の名言を執筆。

▼小川恒明氏（大阪市）は路郎先生指導の松坂屋時代の好作家として鳴らした人だが、時折りは本社句会へ顔を出され「このごろの川柳塔の句はむずかしくなつて、もうついて行けなくなつた」とのこと。

▼山川阿茶さん（大阪市）は麻生霞乃先生を訪ねたり、または電話でお会いするのをたのしみにされている。お二人はむかしからウマ合いという師弟である

▲菊沢小松園氏（大阪市）はご子息夫妻と奥箱根へ。▼板尾岳人氏（富田林市）は白馬山ろくから旅信。

新賛助会員 宮西弥生

▼山田季賛氏（高槻市）は俵山温泉ほか相変らず走りまわり珍らしい写真をとりまくっておられる。

▼岡崎祥月氏（松江市）松江水書の元の家が復旧し、その新居で新春句会を開

き、晃男、通児、孤呂二、鶴丸、町紅諸氏七人のサムライから力強い寄せ書き拝受。

▼橋高薫風氏選の電波新聞柳壇は好調な軌道にのりご投句を待っている。〒530 大阪市北区中之島三の三、朝日新聞ビル六階、電波新聞大阪支社文芸係へ。

▼南海川柳会は十五日午後六時―題は・裏町・とんぼ返り・孤独。会場は南海電鉄本社食堂内。

▼南大阪川柳会は二十日午後六時―題は・邪魔・楯・踏む・スベース。会場は松崎町二丁目以和貴柱。

▼川柳東大阪は二十四日午後六時―永和駅前市民会館―題は・客筋・君と僕・金・くぐる。（カップ・皆勤賞贈呈）

花 公 衆 社

富田林市富田林町24-4
TEL 07212 2064

古方句集自序

戸田古方

昭和四十五年の秋に白柳さんが亡くなり、それに続いて白柳句集の発刊されたことからです。白柳さんと同い年の私。川柳入門以来の私の句を拾ってみたら五千句ほど出てきました。昭和四十六年の夏のことです。丁度その頃、小学校の同窓である砂本悦次郎君から近著の贈呈を受けました。彼は大阪船場の象牙屋の俵、象の皮で装釘した上下二巻、三千頁に余る大著を上梓し、新聞にも取り上げられた、かくれた町の学者。日本より海外に知友をもっているのです。私は何か返礼したいからと書いてやったら折返し、「の君川柳を見せて呉れ」というてきました。昭和四十七年の正月、梅田の紀伊国屋で偶然「小さな白い本」を一冊買つて、それに自分の句を書き込みはじめたのでした。昭和四十五年、私は満六十五歳になって、約三十年勤めた学園を定年退職しました。時あたかも万博の年です。その開会の日と私の定年になる日がほぼ一致していたのです。あと何日何時何十分でと出る。あのターミナルの万博時計ほど憎らなかつたものはありませんでした。私は定年後が、何かしら恐ろしく不安でした。委嘱されて、引続き講師として、元の古巣に留まることができましたが、こぼれてくる時間の空白を埋めるため、翌四十六年の秋まで満一九年余り、ノルマのように毎日絵

具を持ち歩いて、一枚以上水彩を描き続けました。その最初の念願がどうやら達せられたとこはへ、砂本君がでてきたのです。私は欠かさず毎年、三百枚以上絵入りの年賀状を手書きしていましたので、フト、手書きで句集を出してみようかと思ひ立ちました。でもまだ、一〇〇冊の半分余りしか書き上げてはおりません。その間、私に分ったドイツのグーテンベルグって何て素晴らしい、とほうもない偉い人間だったなということが見えてきました。印刷の有難さが、一字、一字、ツマヨウジに墨をつけたして書きながら分つてきたのです。

少くとも、一冊一〇時間以内に仕上がる調子の好い時はとても愉快です。だが、外のことは一切はつたりかし、食へることも邪魔くさくさへなつたりしました。実際、自分の正体を知ることほどむづかしいことはありません。路郎先生から教えられた人間陶冶とは中と奥の両方を兼ねねえられた句を通してはじめて達し得られるものだと思います。つくづく自分でも、自分の句域の狭さを恥じているのです。

恍惚の果てに生れてきたらしく

きのう・きょう

本多柳志

◇進歩とか開発とかが無条件に信じられた時代に代つて、むかしへの郷愁が人々の心の中

へ選つて来たようである。S.Lの展示会に黒山の人が集り、復元された木曾の宿場街は今や観光会社の目玉商品になった。単なる復古ブームとか消費して行くものへの、愛惜の念だけではなくて其処には、現代へのよっつとした反発が見られるのではあるまいか。煙を吐いて走るD51の姿には新幹線にはない魅力がある。カヤ葺きの屋根からは新建材やコンクリートにはないものを、現代人は見つけたのであろうか。ひかりやこだまからは旅情が失われた。便利で頑丈な建物にはゆとりもなければ風趣も無い。われわれはこういう大事なものを犠牲にして、新しいものを得たのだ。昔のいいものを取り戻すためには、今現在もつている大事な何かを捨てねばなるまいとも思う。車の中から排気ガスで枯れて行く松並木をなげいて見ても始まらないと思うのである。私の友人で永らく新傾向の俳句にこり固まっていたのが、この頃になって「やはり虚子は偉いな、ほととぎすはいいなあ」といい出した。息苦しく住みにくいものの中にいや気がさした時人々は、はるかな葉園や遠い昔が恋しくなるのであろうか。そこから逃避した、あきらめたり又は充足のない欲求不満といったものになってしまわないうか。その結果盲目的に、新しいものは凡て駄目だと決めてかかって一途に復古主義に走るおそれも出てくる。それは又進歩への盲信と同じ程度に危険なことではないだろうか。肝心なことは新しいものと古いものとを比べることの中から、新しいものへの反省を育てて行くことではないだろうか。新しい傾向へとやみくもに走り出した川柳人も決して例外ではないと思うのだが。

戦友唱和このホステスも若くなし 柳志

本社新春句会

会場 以和貴荘

八日 午後六時

暖い新春句会である。昨年度の月間賞杯永

久保持は生々庵主幹。十二氏が同点で規約ど

おりに天位四回の最高者が獲得することにな

ったが、二回の人たちは夢成・葵水・肖二・

花梢諸氏。全出席者は二十年全出席の静馬氏

をはじめ、与呂志・新之助・綾女・文秋・古

方・柳志・酔々・瓢太・好一・柳宏子・重人

・葛城・一二三・庸佑・いさむ・維久子・儀

一・牧人・葵水・凡九郎・岳人・鬼遊・一三

夫諸氏。

短冊交換は例年のように瓢太氏が一人で各

氏へ配られる。各賞の表彰がすむと生々庵

主幹の新年ご挨拶となる。

「各川柳大会に招かれ、一つ覚えのように

訴えてきた芭蕉の言葉「古人の跡を求めず、

古人の求めたる所を求めよ」……路郎先生の

七十余年間は、何を求めてのご生涯であつた

か。ご承知のように川柳の社会化運動に捧

げて徹底したご生涯であつた。『旅人』の序

文の末尾に「私には多くの夢がある。私の一

生はまだこの句集『旅人』でピリオドは打た
れていない。とある。

「多くの夢。この多くの夢こそが私達が、

草の根をわけても探がし求めねばならぬ課題

でもあり、私達が救われる道でもあると確

信する」と四十八年度の決意を語られた。

本年初の月間賞杯は村上春巳氏の佳句にか

がやいた。さあこのカップを追って今年もガ

ンバリましょう。

(F)

――河井庸佑整理

出席―いさむ・新之助・好郎・竹荘・与呂

志・太茂津・緑水・花梢・文秋・弥栄子・美

代・滋雀・一舟・古方・瓢太・柳宏子・いわ

を・三十四・好一・悦郎・肖二・綾女・牧人

・酔々・葵水・千寿子・儀一・形水・鶴声・

摩天郎・柳志・金三・一三夫・静歩・喜風・

静馬・吸江・誓二・笛生・春巳・重人・葛城

・一二三・清人・敏・庸佑・千梢・天笑・岳

人・栞・頂留子・あいき・智子・百酒・維久

子・千万子・俊夫・生々庵・多久志・弥生・

夢成・恒子・凡九郎・鬼遊・薫風・葉子。

席題「初詣で」

八木摩天郎選

娘のしたう人の母者と初詣で 夢成

まだ 儲け足りぬ 願いを初詣で 多久志

初詣で 今年も 同じ 願いごと 百酒

お茶の間の テレビですます 初詣で 天笑

伊勢の 初春 ああ 日本は 神の 国 滋雀

縫いたてへ小雨気になる 初詣で 維久子

初詣で 去年の 鬼と 乗り合せ 誓二

押すな 押すな へ神もと 惑う 初詣で 滋雀

妻となり 祈る 心の 初詣で 花梢

玉砂利が 小雨に 光る 初詣で 肖二

元旦の 雨が 神主 笑わせず 一舟

神様を バックに 撮った 初詣で 維久子

初詣で みじくの 運を 逃すまい 牧人

裏道は 昔ながらの 初詣で 千寿子

今年こそ きっと 添います 初詣で 静歩

初詣で 天神さんの 牛を なで 竹荘

お賽銭 ちよっぴり 弾んだ 初詣で 静馬

寝む そうな 顔も きて いる 初詣で 花梢

大凶の みくじを しま 初詣で 柳志

初詣で 孫の 重さを 代り あい 栞

恵方など 知らず 近くの 初詣で 柳宏子

青い 目も 話の タネに 初詣で 一三夫

初詣で 肩ぐる まから 手を 合わし 千梢

もう 一と 花咲かす つもりの 初詣で 柳志

初詣で 日本人の 手の ひびき 一三夫

初詣で 五十鈴の 川を 汚しに 来 鶴声

一〇円 で 一年分の 願い 事 春巳

離縁した 妻と 出会った 初詣で 酔々

マイカーで 親孝行の 初詣で 緑水

初詣で 逢うては ならない 女に 会い 儀一

初詣で 俺だけ 凶と 出た みくじ 儀一

初詣で ミコ 厳肅な 顔になり 好一

初詣で カツラ 落ちそで 拜ま れず 一舟

初詣で夫に濟まぬことも請い 葵水
初詣で常はミニはく娘に見えず 好郎
初詣で牛は牛づれ君と行こ 摩天郎

席題「左利き」

若本多久志選

左利き女の笑顔をだしに酔い 悦郎
粕汁に鼻が動いた左利き 醉々
酔いぐせもパパにそっくり左利き 千梢
左利き右も負けない程に利き 笛生
左利きさほど器用と思われず 恒明
左利きはれてますから氣にならず 恒明
台所肘がからあう左利き 春巳
スリの名人左利きとはデカ知らず 鶴声
左利き同士で握手長うなり 一舟
左利き怪我でホッとす 緑水
さい銭がまともに入った左利き 新之助
左利き無理に矯て親の無知 誓二
サウスボーだけ代打出すチャンス 金三
温豆腐も器用に食べて左利き 静歩
テレビタレントおやあの人左利き 栗

糊ひとつ釣れぬ夫も左利き あいき
堂々と美女は左で箸を持ち 吸江
達筆をびっくりさした左利き 重人
左利きほっとけほっとけ選手にしよ 千万子
左利きママを神経質にさせ 智子
鉄砲をかつぐ世でない左利き 春巳
板前の腕を見直す左利き 柳志
奪三振左腕に輝く世界一 一三夫
トレードに出したい我が家の左利き 重人
甚五郎を引き合いに出す左利き 肖二
仲人も知りませなんだ左利き 恒明
ざつちよのがいちばん強い喧嘩独楽 静馬
結び目で左利きと見たデカの勘 誓二
勝手よい時もあるもの左利き 百酒
左手を使いたがる子にちと慌わて 百酒
変屈でまだその上に左利き いわを
お見合いで左ぎつちよを見破られ 栗
スルスルス左ぎつちよでタリンゴ 天笑
左利きカッブル右利きの子が生まれ 庸佑
左利き横面ばかり打ってくる 太茂津
左利きパパは投手に夢をはせ 柳宏子
左利き便利ですよという大工 綾女
左右使つてわしは左利き 千万子
左で書いた愛の言葉に嘘はなし 俊夫
リリーフの切札に立つ左利き 牧人
手袋を右からははずす左利き 醉々
天才の素養か末っ子左利き 多久志

兼題「牛」

戸田古方選

もうと啼く牛に牧場の朝が明け 章雅
放牧の牛青天に大欠伸 祥月
牛の方が僕の気性を知っている 季贊
老松へ青銅の牛を侍らせて 一栄
牛逐うて夕日に長い影を踏む 幸太郎
丁寧なブラシをかけて春の牛 静歩
放牧の牛へ牛車の牛無口 維久子
余生僅か牛反芻をくりかえす 葵水
来世は印度で住めと牛を撫で 一舟
牛年生れのどこか牛に似て 多久志
人間にこき使われたい牛の夢 天笑
着飾れば牛も祭りに生きてくる 滋雀
童児追えば牛喜々として走り出し 栗
タイミング合わない声で牛はなき どんたく
牛の角かも知れず或る時の私 凡九郎
牛の糞馬の糞なく国が荒れ 醉々
牛の背にアブ一匹の憎らしさ 俊夫
女房の手綱で動くこつて牛 柳宏子
何もかも往生をした牛の目だ 千寿子
動物園へ来て恍惚の牛となり 薫風
引かれ行く牛にも綱の心知る 柳志
子の画布に牛がねている平和です 葛城
トラックに積まれる牛の目がうつろ 美代
げんげ摘み邪魔なところに牛が居て 形水
ご所車曳く牛だから飾られる 静馬
あわてんば牛の目玉ににらまれる 肖二
千万子

牛になる 簾けを古いと笑われる 清人
角二本書いて牛らしくなってくる 千梢
遮断機へ牛放尿の眼をつむり 菜

昨日まで牛が鳴いてた広さなり 春巳
絵馬堂の牛たつぷりと拝まれる 静馬
ウシウシウシウシ 搾取に逆わず 古方

兼題「勢ぞろい」 傍島静馬選

勢ぞろい 大阪時間に やきもきし 章雅
勢ぞろい 人数揃える エクストラ 幸太郎
仇討のそば屋の二階へ 勢ぞろい 一栄
オフィスの初出へ 晴着の勢ぞろい 弥栄子
年玉のいる子ばかりが 勢ぞろい 俊夫
新春のカメラへ 一家の 勢ぞろい 智子
勢ぞろい 初荷へ 景気の よい 拍手 柳宏子
勢ぞろい 初日を 開ける 祝い酒 多久志
初日の 出富士山頂に 勢ぞろい 酔々々
勢ぞろい 共産党の 議会入り 摩天郎
大物が 一番遅れて 勢ぞろい 庸佑
当選へ おらが 一家の 勢ぞろい 与呂志
消防車 勢ぞろい した出 初式 好一
最高の 着物で タレント 勢ぞろい 千万子
事始め 縁起を かけた 勢ぞろい 百酒
タクシーで 来たのが 最後勢ぞろい 清人
勢ぞろい 故郷の 母を よる ことばせ 緑水
勢ぞろい 一人の 遅刻 いらだたせ 綾女
優勝を 盟う やる 気の 勢ぞろい 牧人
二次会へ 行く 約束の 勢ぞろい 竹荘
鉢巻が ベースアップへ 勢ぞろい 弥栄子

威勢よい 木遣り 法被の 勢ぞろい 肖二
野次馬も 中に まじって 勢ぞろい 花梢
勢ぞろい 京の 舞妓の 数も 減り 緑水
ミス日本へ 挑戦 美女の 勢ぞろい 三十四
形見分け 親類 じゅうが 勢ぞろい 一三夫
勢ぞろい 今年 孫の 顔が 増え 緑水
突っかけも 草履も 混じる 勢ぞろい 多久志

勢ぞろい 末っ子 だけが 独身者 清人
勢ぞろい したとこ デカに 包囲され 儀一
勢ぞろい した頃 割勘集め に来 竹荘
勢ぞろい ようまあ ころも 産めたもの あいき
いける 口雁首 揃えた クラス会 静馬

兼題「初版」 西尾 菜選

著者 署名入りの 初版に 高い市価 章雅
商魂は 初版ブームを見逃さず 幸太郎
「恍惚の人」の 初版を まわし読み 一栄
初版は 日本列島 トップ 記事 祥月
発禁に 前評判に 釘さされ 八郎
伏せ字 だらけの 初版に 世の 移り見る 牧人
初版も う 括られ 返本 されて 来る 葵水
初版本気 違い 相場 ついて いた 静歩
初版本 誤植の ままで 値が 上り 鬼遊
貸した まま 失せた 初版に 値打ちが 百酒
再版へ 初版の ミスが 役に 立ち 柳志
親戚と 知人で 初版 買い 占める 千寿子
文士 逝く 初版の 命よみ 返り 美代
その 初版 値段を 聞いて 腹が へり 一三夫

ほろほろの 初版の 詩集 すて 切れず 綾女
初版本 作家の 自殺 見直され 静馬
初版という 貫録 書架を 引き立たせ 頂留子
サンブルに 残して 置いた 初版刷 鶴声
初版から ベストセラーの ポルノもの 多久志
古本の 魅力 初版も さがし あり 竹荘
大半は 寄贈に なっている 初版 花梢
思い 出の 初版 戦後の 彙半紙 笛生
ため 書きが あった 初版を 飾られる 葵水
義理人情 初版に 生きる エピソード 酔々々
一頁 開く 初版の 手の 重み 維久子
半分は 序文に 光る この 初版 千万子
食うや 食わずの 苦労が 滲んで 初版 一三三
古書の 会 初版 マニアの 顔なじみ 一三夫
大ミスが あって 珍本と なる 初版 百酒
奥付けは 妻へ 論ると ある 初版 千寿子
読みづら い 旧かな 使いの 初版本 誓二
自叙伝が 初版であって それつきり いわを

再版どころか 初版 売れ 残り 古方
骨董の 値打ちで 初版 愛蔵す 牧人
時の 手に 触れて 初版の 返り 咲き 美代
飾っとく だけの 初版を 買い あさり 文秋
浅草に 荷風の 初版 生きて いる 美代
半分は 押し売り じみて いる 初版 恒明
覆刻を されて 初版 という 魅力 葵水
鷗外に 若き 恋あり 雁 初版 酔々々
初版 やつと 寄贈分が 減っただけ 好郎
初版 には 読者の 意見 聞く ハガキ 多久志

浮世絵の初版アチラへ買いに行き 静馬
検閲の厳しい頃の初版持つ 形水
ケチ自慢 書いた初版がみんな売れ 一舟
大臣の書いた書物は初版だけ 栞

兼題「子ども」

川村好郎選

年玉をもらえば帰えろという子ども 綾女
七五三子どもは迷惑 そうな顔 どんたく
成人式 親から見れば未だ子ども 清女
子どもの為母強くなり弱くなり 庸佑
風船の自由を縛る 子どもの手 酔々
子と遊ぶしばしを童話の部屋にする 弥生

私のメモ

吉田水車

◎元来日本人は外国語の会話が下手だと言われている。四面環海の国土の関係もあろうが外人に比べるとうも不器用らしい。以前外人の日本語に対する関心度をご紹介したが、も一つ申し残したのである。披露に及ぶと、これもやはり私の知人の独逸人のことである。来日一カ月位で大方の者がするようになり大休日常不便のない程度の言葉はしゃべるところでその知人はセールスエンジニア

奴 風 童 心 冬 の 空 を 駆 け 牧 人
邪気のない子供の問いが胸をさし 好一
育児書の通り肥満の子が育ち 酔々
ブツブツと言うも子どもに引きつらぬ 吸江
子どもやと思うては娘のラブレター あいき
一日一日一児の父としてめくり 一二三
泥の足ついでによその子も叱り 摩太郎
子ども等とする歌がた軽く負け 綾女
ひと抱くものに子があり母強し 栞
とばくでもいどコマーションルに教えぬ 一三夫
叱ってる父が子どもに見おろされ 鬼遊
疑いをもたぬ子どもに言い負ける 花梢

であるが、機械の据付け試運転の際にはメーカーの職長級の人が応援に来る。これが英語はおろか訛りのきつい自国語しか出来ないの、こちらも片言位の独逸語が出来ないと不便きわまることがある。大方日本に来る程の人は英語が堪能な者が来るのでそれをよいくとにして私などは職務上必要最小限の専門語位しか覚えようとしなかったのである。ところである時右のエンジニア君に「君はどうして日本語を覚えるのか」と聞いてみたら、「私はずいぶんさがして、よい辞書を見つけた、君もそれを購ってみては？」と答えながらポケットからとり出した本は日英独対照になつてゐる辞書であった「原書房発行、日英独語辞典で日本語はローマ字で日本字がカッコ

出稼ぎの父なぐさめる 仮名便り 鬼遊
家のあら皆喋ってる 子の会話 誓二
帰省して子どもにもどれる母がいる あいき
親のいうとおりにする子で物足らず 千寿子
子どももう大人と指切りしたがらず 静馬
子どもからすすめられてる 社会編 花梢
叱る子を間違えてゐる子 沢山 維久子
父ある日大きな子どもにされてゐる 天笑
集金へ留守と言おかと子ども 静馬
ベトナムの子どもも今日も明日もない 春巳
泣くときはサーヤと同じうちの子も 好郎

コ内に記してある」。負うた兎に教えられ何とかで甚だていさいの悪い思いがしたと同時に彼の熱心さにひそかに敬服させられたものであった。その他に都々逸を唄うのもあったし、一緒に商売に行つて、客から値切られたとき「われわれの利益は雀の涙ほどです」と言つて客を煙にまくこと位はやってのける者もいた。そんな時私共ならきまつて「そんなにまけては元が切れます」位が普通だが言葉の貧弱さは右の雀の涙におしえられるところが多いと感じた。その辞書を必要とするところから遠ざかった今、私は書架でいたすらにほこりをあびてゐるのを見るにつけ感無量といふところ。



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

川柳塔まつえ(前号のつづき)

明治われ桐は柾目の下駄に立つ
几張面な意見上司とくい違
先手必勝改造論に波紋なげ
叱り飛ばした寂しい夜よみな無口
寝化粧を怠たる妻となつて老い
ドイツ東西の朝鮮南北日本ひとつ
悪知恵の原点奥目がよく光る
天と地のいかり日本へ傷跡残す

高知川柳社(高知市)

川竹松風報

仲人の話まともに聞けぬ今日蟬
水嵩を足で計った夜の不安窓花
この苦勞思ひ出となる日を信じ
うたた寝へ枕をやれば起きあがり
まん珠沙華赤く炎えても片思ひ
その昔赤いリボンへ片思ひ
その人の犬を撫でてる片思ひ
気にかかる噂を聞いた片思ひ
セーラーに包みかねてる片思ひ
片思ひ今日もピエロの笛を吹き
身の程を知らぬ水着かも知れず
プロボーション自信があつて夏が好き
火の車から酒代が出る不思議
生酔のハシ定まらぬ冷奴

野次馬の誰かが呼んだ救急車
救急車走りつかれた声になり
救急車石地蔵さん悲しませ
産院へ間にあいかねた救急車
救急車盛り場はまだ宵の口芽
救急車走りつかれた声になり
救急車石地蔵さん悲しませ
産院へ間にあいかねた救急車
救急車盛り場はまだ宵の口芽

川柳東大阪

竹中肖二報

深入りをして揉め出した保証印
深入りのもうUターン出来ぬ距離
線を越してはならぬ妻の顔
ロッカーで敗戦投手孤妻なり
ロッカーへ娘憚らず派手に脱ぎ
ロッカーに触れた遠端にベルが鳴り
終業ベルロッカーの鍵たしかめる
ロッカーは一つ社長の顔でいる
ロッカーを綺麗に拭いて退院日
退社時のロッカー解放感あふれ
囁託にチャキなロッカー当てがわれ
腹立ちを忘れさせての子の昼寝
昼寝する男の顔に欲がない
母ちゃんは昼寝坊やはない
大勢の昼寝よ生んだあと思ひ
邪魔された昼寝の分も犬は吠え
玄関へ昼寝の顔で出迎える
事足りて生駒へ足が押し返えり
大年の計が二月で押して来る
あの星がまた見えはじめ思う
どんぐり川柳会(大阪市) 谷垣史好報
傷心の旅の靴はふくらまず
判決へ他人に靴はふくらまず
一泊の妻の土産の旅靴比呂路
せわしいと云いつつ気にまひの事
孫娘靴を選ぶ年になり靴サヨ
なつかしい学生時代のかけ靴

靴持ちこれもサラリとあきらめて
自惚れて代表挨拶あがり気味
靴さげ今日も一日セールスか
マイホーム他人が見る程なし
婦長から試されていたインタ
自信まだ自惚れと気がつかず
靴一つ提げて欧州一週り
セーリスの自惚れ土産を一つ買
D51の自惚れ時代には勝てず
他人ごとと決めて団地のドアを閉
試されて他人のを知っている養子
争うた他人を日記の中で合
風船のふくらむ大さき試し合
自惚れの次第にさむき待ち合
自惚れの鼻へし折つてよそへ嫁
郵便の靴明治の匂いは嫁き
旅立ちの前夜は靴に夢を盛り
へそくりも靴へ入れて持ち歩き
靴から出す北爆の命令書
地球儀をのぞけば他人笑つて
宝くじ他人様にも配る夢
自惚れが強く主流に遠く居る
史好

まるべに川柳会(大阪市)

村田飄太郎

編機出し仕上げるを急ぐ秋の冷
からこうして上げは猿か人間か
冷たさもクールと言わねスター
言葉なく重ねられた手の暖かさ
重ねるの割には平行線の恋
からかうと見せて本心覗かせる
へそくりの指輪をかくす手を重
ハイミスのショック今年の菊も過
せち辛い世なればこそ心暖かく
川柳ささやま 河原みのる報

小学卒業革命に遠く居る
 基盤整備千古の革命成し遂げる
 参観日ママ交身の見せどころ
 変身をしたが腹黒だけ残り
 問題にならぬとアッサリ断られ
 酔いざめへも一度小言聞かされる
 もう一度猿にバイバイして帰る
 もう一度医者に聞くのが恐ろしい
 虫干しへも一度こんなの着てみたい
 ベテランをひやりとさせる言葉聞く
 さすがベテラン急所をついて静なり
 抱きあえば月日は遠慮の雲に入り
 あかね雲じつとみているわが孤独
 標本は未来を知らず静止する
 それからはもう気がしない月の石
 トンボ蝶針ピン五本で夏終りの
 食糧難語る干飯瓶の中
 フラワーロードカンナの色事故思

川柳ウイロー社(ハワイ) 林蒼蛇樓報

仕合わせは未だまだ元気な夫があり
 長命のしるしと歯なみほめて
 何となく歯の浮くような上手言
 仕合わせは故郷に此る母が居り
 年金で今日の仕合わせ手を合す
 歯切れよい啖呵嵐の拍手呼び
 嫁ぐ娘へ仕合わせにねと母の言
 歯の抜ける様に老友かけて行き
 目に見えたらうそを奥歯かみしめる
 応援に入歯とび出すホームラン
 母親の幸わせ赤ん坊にいらぬ
 また一つ歯を抜き更にとらぬ
 伴わせは布哇の空の下に住み
 お医者とも縁を切ってる健やか
 糸切り歯のぞく笑顔で迎えられ
 入歯ではむりかとリンゴにかぶり

可住 近江 越山 村雨 与志 雅佐 初音 無陣 八聖 無陣 青峰 素水 百合子の 宗よしの 珠

幸わせを孫の笑顔がもって来る
 仕合わせは待たずに努力でつかむ
 育ての姉雄々し果立つ仕合わせ
 長男の婦唱夫随を歯痒つわが
 大あくび入歯おさえてかみころし
 南海電鉄川柳会(大阪市) 辻圭水報
 炎天下複雑通過待つ無帽
 複雑の噂地価うごき出し
 複線へもう事故が出る忙しさ
 メロドラマ複雑だからすれ違い
 複線へ歴史の苦勞忘れられ
 よしなが川柳社 横山一声報
 銀座の灯ミニと長髪よいコンビ
 コンビだと云われた仲が割れ始め
 またしてもコンビが揃う縄のれん
 強盗のコンビの一人が逮捕され
 ヒョットコンとブスのコンビにも魅力
 いいコンビここに眠れる夫婦墓
 トンポにもコンビがあつて二匹とび
 甘いコンビに敵しい生活かかつて
 竹槍とモンベのコンビ思い出し
 悪友をよいコンビだと皮肉られ
 顔だけを並べてコンビ義理がたち
 名だけ初めはテニスのコンビ
 お辞儀しただけでコンビは笑わせる
 悪友と云い云いコンビ誘いに来
 和歌山七面句会 三幸報
 運ちゃん抱かれて子供届けられ
 恋女房結ばれたのもみつかれ
 国会のマイク野党にかみつかれ
 みかん狩り帰りのバスはみかん畑
 遠路来て買う程高い蜜柑狩
 敬老日他人の子供に祝われる
 笑子 稠子 河舟 舟山 河舟 稠子 河舟 稠子
 儀一 宏一 清一 貴一 柳一 圭一 水一 報一

巣立ちした子に生きがいを教えられ
 知らぬ子とすぐ手をつなぐ子供にて
 日曜日マイクでおきの選挙戦
 子供の日父が玩具のラッパ吹く
 宴会のマイクまわったあてよう
 値上りをマイクに怒りぶつけれ
 汚れたい子供の服に気がつかれ
 丸文川柳会(倉敷市) 竹内翁童報
 旅に来てまで麻雀に明け暮れる
 タイズ狂ヨーロッパへまた出かけ
 新入社員気でないかとの母の声
 電話では恋人同士も母の電話線
 お空まで継ぎたい予報の電話線
 新入社電話のベルに固くなり
 赤電話あと三十秒のプロポーズ
 うたた寝を電話のベルがゆりおこし
 城北明朗会 川口弘生報
 山間に住んで茶の水自慢する
 酔さめの水を杓子から飲む孤独
 開拓者水波む谷へ二キロ降り
 島育ち水の苦勞を知りつくし
 老人は井戸水の味忘れたく
 ポロ家に水性ペンキ塗られたく
 年寄りの冷水ですよとひやかされ
 河川別ラベル貼られて並ぶ水
 友禅の美しさをたづねる水
 岩清水のんで谷間の小休止
 カユする程の恩給うらやまれ
 寺詣り南無阿弥陀仏お土産
 迷いがあつて人生夢が有る
 尋ねつて迷いつつ旅路もう暮
 鈍行のおかげ人生事故もなし
 川柳大阪 児島与呂志報
 夕立のあがった後で傘が来る
 のりかえた新車の色は妻好み
 欣松

正直で真面目で家は子沢山
忘れてた風鈴秋の風で鳴り
告白のムードをこわす風の音
情緒なく電子レンジでサンマ焼
上品に育てひ弱な男の子
正直をほめて叱言の手をゆるめ
上品な器に飾るアユの味
庭下駄の冷めた上品もしく風の音
酒が出るまでは上品らしく見え
のりかえに別れが惜しい旅の人
のりかえてアツと気づいた忘れ物
知名度がのりかえさせた全国区
知名度ののりかえさせた全国区
酒気運転風船並にふくれ居
名門の流石気高く落ちぶれる
正真は宝そのまま平社員
損しても正直でよしほめた父
胎動と鼓動愛をたしかめる

オーエスケー川柳会 大坂 形水報

ちびっ子が喜ぶおもちや 親がとり
ちびっ子ヘイレクターの目集中し
気短も赤では行けぬ交差点
ちびっ子の嘘は言えないきれいな目
ちびっ子の夢より教育ママの夢
ちびっ子の主動権あり日曜日
さっそうと乳母車押すパンタロン
気短が一人居たのでまともならず
気短が課長のポスト遠ざける
脚線に自信ないのでパンタロン
気短のバックボーンに有る自信
パンタロンお膝で用尺倍も売れ
気短のくせに熱いうどん好き
動きよから穿く主婦のパンタロン
ちびっ子が動く手すりを持ちたがり
気短と気長夫婦それでよし
堺・駒つなぎ・若芽合同句会八木摩太郎報

茶々坊 笑風 胡蝶 秀峰 三十四 誓二 真実 一乃 本蔭 木蔭 楽々 武松 漁人 六童子 重人 与呂志

早春の游峽へ
三月十七日(土) 午前九時半 国鉄天王寺駅集合
特急→紀伊勝浦→(バス)
→那智滝→(バス)→新宮(一泊)18日旅館→ジェット船(借切)→游峽
往復→新宮→特急→天王寺帰着(午後6時ごろ)
会費 約九千円(お小遣いは含みません)
申込定員 申込順30名で締切ります
申込先 大阪周辺は菜の花句会幹事へ紀北紀南は垂井葵水まで
兼題 「10」「みかん」「体操」「城下町」「流れる」「和」「宴会」(選者は当日発表)その他車中、船中で即吟会あり
旅館 新宮市丹鶴城跡二の丸旅館(0735-2-5251)
主催 菜の花川柳会川柳わかやま・しんぐう吟社
共催 川柳塔各グループ

嫁無邪気過ぎて家風に骨が折れ
先に種見せて無邪気な子の手品
捨れられて赤ん坊無心に笑うてる
計画が洩れている坊にまだとぼけ
幸福な灯はそこへ洩らさない
洩らされた言葉の裏が読みとれず
不用意にもたっし本人気がつかず
まだ起きて待つてるらしい灯が洩れ
洩れているらしい近所の風あたり
雲流れ月光洩れる待ち呆け
婦省した二人わが家のお客様
婦省する度うまくなる標準語
浮き浮きと初孫連れて行く婦省
土地の値の噂にふれてきた婦省
婦省せず田中総理も母の夢
政界の動き婦省の数が殖え
左久良 筑前 祥恵 つき子 眉一 藤持 小松園 茂美 宏路 儀一 柳影 静馬 草春 一二三
ひきわけて決着つけたオール3
学童に傷を残したオール3
ライバルと同点ママが承知せず
気に入らぬ同点地球へたたきつけ
特賞をひとつ増やした菊競べ
同点の二人へ粹な一等賞
笑痴 岳深 悟郎 柳信 遊仙 左久良 筑前 祥恵 つき子 眉一 藤持 小松園 茂美 宏路 儀一 柳影 静馬 草春
裏方が粹をきかせた同点賞
無邪気さを笑う祖母の繰入歯
仏法を聞いた一日だけ無邪気
君達のように無邪気な若夫婦
叱る気にもなれず無邪気な泥遊び
無邪気さも無視した親の七五三
無邪気さが出て老人の先案じ
膝へ来る孫の無邪気に湧く茶の間
年頃の無邪気を世間ほっとかず
パンダから見れば無邪気な日本人
高知川柳社(高知市) 川竹松風報
暴走の車がとめた立話 一二三
お野菜が高いと主婦の立話 一二三
冷えきった皿の完全看護食 星雨
酒よりも妻の笑顔に労がいえ 正喜
庭園の露をはじいて犬走る 伊津志
ハイヒール走れ走れと鳴り続け 蟻蛇
発車ベル走れ走れと鳴り続け 窓花
青空と別れ白雲走り去る 窓花
造作の窓も喫茶にするらしい 窓花
窓閉めてから声落とす話あり 窓花
民宿は紅一点へ気を使ひ 窓花
酔うほどに肴になった紅一点 窓花
素春 龜甲 紀人 窓花 蟻蛇 伊津志 正喜 星雨 勝子 一二三 育園 左久良 清女 德子 青香 千寿子 摩天郎 葵水

紅一点酒豪の部へも名を連ね
紅一点の嘘を許している仲間
お隣りの傘が転げて晴れては
政治家の夢におもたけ空の青
少年の拳開けば空がある
青空の下人間がアリになる

駒つなぎ (大阪市)

岸南柳報

里帰り母が間違う派手姿
整形をして変身をしたつもの
変身をして気分かぬうちの人
デパートで変身術も習って来
離れゆく男心へ洗って来
この年のおしゃれかざるの髪洗う
洗髪のずばるとこんなとこで逢い
診断に洗髪だけの許し受け
石けんの泡まだ髪がある証拠
髪洗う女同士見返す男前
髪洗う女 匂う水も秋

川柳ささやま

河原みの報

道路地図頼りに知らぬ道を行き
地図 抜け私もここにいらんだワ
僕の英語より向うの日本語がわかり
ロケットと英語で云えば野卑でなく
ローマ字の恋文 隠居に見破られ
平和への新風 大学出にあらざ
嫁が来て黄色い声の風が吹く
新風も掛声ばかり霧はれず
スイッチ一つ美まで行ける世に変わり
閃電の死活 美浜の灯がは入り
青空に 刈る 稲の名も日本晴
街の児の絵に 青空は画けぬ色
おにぎりの匂いが大きな慈母の掌よ
やき鳥の匂いがこもる 梅田の地下
内職は 一服もなく積み重ね
青空と 緑を食いに会社来

松風 博造 紅雨 大破 夢迎 南柳 柳園 柳信 宏子 眉水 規一 儀一 悟郎 恭太 摩天 小松園 初音 喜美代 可住 宗郎 生珠 無聖 雅佐女 拓陣 八平 近江 蜻蛉 英断 百合子 ヤン坊

長生きをカラー写真で残しとき
おにぎりが場を塞いで幕の内

川柳東大阪

竹中肖二報

ホルモンの匂いチョッピリする難波
高島屋 関所のように聳つ難波
難波から戎さんへは歩かされ
終発に高野の僧が急ぎ足
僕が乗る電車に迷う地下難波
あべこべな夫婦にまともな子が育ち
よく喋べる奴がテストで堅くなり
モデル地区などとテストにされて
遠慮なく喋りテストをされていた
もう欠伸出そうなる頃の茶がはいり
欠伸したのでもう一ツ叱言ふえ
満腹になって欠伸の子が眠むる
欠伸したついでに時計見上げられ
告白の瞳だ素直に信じしう
告白の女やっばり金らしう
気楽さは家柄かくし住む長屋
顔よりは家柄仲人ほめてくる
家柄はどうあれ野望持つ男
家柄が似合い見合いで断わられ
おちぶれてまた家柄を口にする

和歌山七面會

三幸報

野暮用に居留守使うた年の暮
高慢な態度へ沈黙という嘸い
留守番も負けじと女友を呼び
出戻りの姉が留守番役を買
留守番が言った通りの雨になり
ストリップえらい人程前に来て
ただ貰い買う程高くついた愚痴
カギツ子の家 目白来て鳴く日もすがら
残高も無いのに 小切手切る土曜
ストリップもうあほらしい歳になり

金比羅船々酔うと裸になる社長
ストリップ一枚ごとによるこぼれ
つい日も開けてのぞいてストリップ
日当の高い庭師の長焚火
二つほど灸の跡あるストリップ

どんぐり川柳會 (大阪)

谷垣史好報

新婚で聞いた河鹿をひとり聞き
カンフルを射ってドラマ明日越す
叫びたい心 沈めにきた夜道
SOS たいの 声の声を運ぶ風
当選があぶないらしい叫ぶ声
パスポートももう嬉しい日の注射
泣きやんだ子を注射器がまた母かす
新婚の一夜も聞きたい泣かす
新婚のうちは素直なよい返事
百舌叫ぶ秋の便りを聞く病床
経験を重ねたひとの底力
重任の社長白髪が増しただけ
嫁ぐ娘に重ねた苦勞語るま
注射ダコ残して師走やと越え
看護婦の手も注射器も冷たすぎ
叫んでも叫んで物価に耳がな
皮に穴あけてのぞいた注射針
海へ叫ぶ母なぞの注射歌
又嘘の公約叫ぶ人ばかり
いたわりの眼も新婚の面映く
点滴のしずくよ命頼みます
新家庭みな悪友に見える妻
南海電鉄川柳會 (大阪) 辻圭水報
長患い待合室でつれが出来
待合室 今日大安という姿
新婚は待合室の目をあびる
待ちわびて待合室にさす夕日
待合室同病の友増えて行く
ハネムーン見送るロビーの賑やかさ

陽童 芳光 一峰 幸 凡 三 幸 醉々 葵水 鬼遊 幸一 草春 比呂路 百合 儀一 喜風 弥生 悦郎 岳砂 好郎 小松園 史好 守岡 圭水 貴美代 柳信

待合室 スリの目と合うバッグ持ち
待合室でやっと押えた家出の娘 摩天郎

城北明朗句会

川口弘生報

土地の値が高くて細いビルが建ち
秋くれば土は見えぬが虫の声
週休二日土曜のイメージぶちこわし
植木鉢土の手入れで木がそだち
故里の土の香りは 芋畑
故害も土の中まで這り込み
天災人災の 化粧でこさっぱり
さつま芋水の 化粧でこさっぱり
故里の土の香こめて小芋着く
土地つくと云うても猫のたい程
トレードマークの 無精髭猫がいり
亡き妻に留守を頼んで鍵をかけ
束の間のよるこびでよい孫帰る
無愛想だけど 真実味のある男

宏子 弘生 繁子 濁水 秀村 茶坊 生々坊 志津 津志 辻ね 春果 隼人 進 三十四

川柳大阪

児島与呂志遠

めす猫を争う声のすさまじさ
更年期男くさき鼻につき
台所へ嫁を追いやり内緒言
厄済んでどうやら男の角が取れ
久し振り枕ならべて落ちつかず
夜と昼二つの顔で稼ぐ腹
無駄骨と思へど養理のある絆
あぶない橋何度か渡った立志日
門にまで見送る母の遠足伝
お歳暮へきれいな嘘も配られる
真中の豆腐ゴトゴト冬の味
卓机の前たに母が居て来よう
出稼ぎの便りが女文字で来る
代筆がきかぬ一票へ仮名の文字
性は善嘘は顔色からこぼれ
今宵又欲求不満のきつい酒
敏 欣 喜 二 馨 胡 秀 重 八 吞 力 笑 本 武 松 微 舟

雅号ぶつちやげばなし(107)

じゃくようし



岩本雀踊子

い わ も と

清水白柳氏菊沢小松園氏、魚住満潮氏
らと川柳若葉時代暫く鬼丸の雅号で作句
していたが柔道、剣道、魚釣等、何をやってもながつづ
きせず、柳友の皆様が良い人ばかりだったので、せめて
川柳だけはとヨチヨチと柳友の後につづき、あき性の
出ぬうちに「雀百まで踊りを忘れん」の古い諺に習
い雀踊子と改号現在に至るが、生れつきの鈍行型、思
うにまかせず赤面ばかりしています。
最近作句に欲が出来たのか一句でもと川柳に精進し
ていますが、柳友皆様の御声援御指導のほどお願い致
します。

会社員 六十二歳

訪中へウンともスンとも 新左翼
生き残る蚊は重い 血でひと休み 与呂志

南大阪川柳会

金井文秋報

仲人の四角に坐るいい日柄
チクタクとたとえ話がせめてくる
かたことと途切れとぎれのちがとう
潮時に愛の言葉が出て来ない
片言の子とママ不思議な話する
さわやかな真実を曲げさせず
片言が見た 朝実を曲げさせず
水槽で金魚四角な世と思ひ
四角でも丸でも安い方にする
いい匂い 飯病で寝てる鼻へ来る
花火爆ぜ宙を向いてる鼻の穴
ビル谷間四角い影が移動する
鼻先で笑われバレたかと思ひ
太陽よ 婦人警羅の顔焼くな
炎天の蟻をたとえに励まされ
その鼻が真ん中にならぬ 福笑い
たとえはでたしかめてみる愛の脈
善意とやたとえ片言であろうとも
片言がとけかけて来ては去に
片言ひまパフの感触忘れぬ
四角四面祖父の意見もずれが来る
潮時と見たか夫婦が仲直り
輔導した 婦警の胸へ泣く家出
まさし我が子鼻天井をむいた
潮時は足のしびれが知っていた
俊敏なテカが借りたい犬の鼻
せりぬい 婦警に あった女の香
セールの 勧めめる 沙時当てにせず
潮時にメンツというのが邪魔になり
潮時ははずし 男の値打ち下げ
片言のニボツポツ切ってカナタイプ
潮時を伺うている 通夜の席

柳志 好一 小松園 悦人 牧代 美舟 静香 恒明 文秋 醉々 柳宏子 儀一 滋九郎 凡九郎 花方 古郎 葵市郎 喜風 誓三 君金三 岳人 頂留子 静馬 新之助 綾女 柳信

本社二月句会

日時 二月七日(水)午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

柳話 若本 多久志

兼題 「八方美人」

菊田いさむ 選

「尾行」

橘高薫 風選

「ボイコット」

大坂形水選

「自尊心」

菊沢小松園選

席題 二題 当日発表

各題三句以内厳守

会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鯉谷仲之町20

川柳塔社

3月の兼題 「ヒナ壇心」 「草手落ち」

募集

四月号発表(2月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選

水煙抄(10句) 北川 春巢 選

課題吟(各題5句以内)

「踊る」 葛城 伊三郎 選

「合鍵」 村上 旭童 選

「鼻っ柱」 青木 遊星 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

五月号発表(3月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選

水煙抄(10句) 北川 春巢 選

課題吟(各題5句以内)

「五月晴れ」 原 独仙 選

「記憶力」 今西 章雅 選

「来客」 中川 晃男 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

明日のくらしの コンサルタント



アベノ店

上本町店

奈良店



TEL アベノ店 621-1231・上本町店 779-1231・奈良店 33-1111

定価 二百円(送料十六円)

半年分 千二百九十円(送料共)
一年分 二千四百円(送料共)

昭和四十八年 一月二十五日印刷
昭和四十八年 二月一日発行

大阪市南区鯉谷仲之町〇番地

編集兼 発行人 中島 蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 542

大阪市南区鯉谷仲之町〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

●ペンペン草●

★本社宛にたくさん賀状をいただきながらそのままになっております。毎年このとですが申しわけございません。

★水煙抄のカットを書家の久米奈良子さんにお願しました。「薬師寺のあのすばらしい水煙を心にかがきまし、写真を見ながら書きまじ」と云う。この人も「川雛」時代「近作柳樽」で勉強した現同人である。一水煙の筆とり幸を祈る新春（はる）奈良子。

★次号で五百五十号になる。三月号は毎年女流作家にご登場ねがっているのので次号は何かやってみたくて思っている。

★昨秋岡田嘉子（七〇）が34年ぶりに帰日してオールド・ファンをよろこばせたが、旧ろう26日に飯田蝶子（七五）が死んだ。岡田嘉子は短歌の情熱の人だったが、飯田蝶子は川柳の庶民タイプだった。

★岡田嘉子に関わりのある本が三冊ほど出た。ぼくの映画記者時代の先輩南部橋一郎氏の本だけは読みたい

と思いがらまだ手にしていない。彼女の映画をはじめて見たのが大正十年ごろだからスクリーンを通じて五十年以上のファンということになる。当時の異色大作「襦袢の舞」に主演したころはまだ二十前後のういういしい女優だった。だのに相手役の二枚目山田隆弥と恋愛して世をわかせたものである。彼女の恋愛遍路はこのあたりからはじまる。

★問題の雪の脱出当時（昭和十二年十二月二十七日）は、日活で竹内良一（男しやく）という相手役とも問題を起こし、「椿姫」の宣伝写真をマスコミなどに送りながらも姿を消してしまっ

葉子コーナー

▼二月は雪も多く、スキーも足に馴れるので一番滑り心地よい。幼少の頃つつかけの赤のスキーが剥げるのでエノグを塗ったのを思い出します。背丈のスキーが重く感じスリッポンをはなしてはスリッポンも20年もスキーを足にした事ありません。

た。その代役は「椿姫」で女中役だった新入社の夏川静江がとめ、竹内の復讐にえらばれたのが東坊城恭長（男しやく）入江たか子の兄）だった。とくに夏川静江扮する椿姫のメーキャップは、五十年後の今日でも通用する細いマユ、アイ・シャドウのドギツキなど、当時としてはオドロキものだった。さて話をもどして、雪に消えた愛人杉本良吉は獄死、そこで滝口新太郎（これも元日活二枚目スター）と結ばれ、あとの夫の滝口の遺骨をもつて帰国したのはご承知のとおりだが、ソ連人？岡田嘉子の幸福を祈ってやりたい。

★飯田蝶子は女土方役で、お尻をかいたアドリブ演技で幸運をつかんだように自分からも云っているが、当時の無名俳優はいろんなテを使って売り込み必死だったのだ。ぼくが彼女に惹（ひ）かれたのは、婦人記者までしたインテリが、俳優として生きるため手内職までした努力家だったからである。

★栗島すみ子に可愛がられ、その夫池田義信監督に

よく役をもらった幸運もあってNO・1女優の映画に多く出演していたことは彼女女を大きく伸ばす原点ともなったのである。栗島すみ子の表紙でないと雑誌が売れないほどの人気女優と、これまたただの一回も表紙に出してもらえなかった飯田蝶子、問題はマスクにあっただけに、やはり美人はトクだ。

★飯田蝶子は二十六歳で映画入りしたが、それまでに一度結婚に失敗したと聞いた。夫クンは撮影助手だが、もつといい人が見つからなかったのかと、当時は彼女のためにオウヤマを云いたかったものだ。山田五十鈴が月田一郎（嵯峨美智子の父）と結ばれた時もそんな感慨だった。一これは余談だ。

★ここまで書いてこの後記は次号にまわせばよかったとクヤシんだが、まあいいだろう。とにかく川柳のスターがポツリポツリと折れて消えていくのはさびしい。

★川柳のスターといえば上田吉二郎もそうだった。新国劇の辰巳柳太郎に、沢正

の「国定忠次」をそのまま再現させたのは上田吉二郎の指導力にあった。松竹新喜劇の藤山寛美なども川柳のスターであるし、映画の麗美清などもその路線を走っている。ゆらい三枚目にバカはいないといわれているが、外国版川柳の大スターにチャップリンがいる。★このごろはなにかもみなカシコぶって、川柳までカシコぶってきたとあつては、川柳がオモシロクなくなるのも道理とおもう。（不二田一三夫）

疲労回復・肩こり・神経痛に

アリナミンA

☆25ミリ錠・ほかに5ミリ錠
☆食後すぐのものが効果的です
☆くわしくは医師や薬局・薬店で



昭和四十二年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十八年二月二十五日 印刷
大正十三年二月一日発行(毎月一日発行)
通巻五〇九号

川柳塔

二月号

定価二百円(送料十六円)



ワンカップ大関

大関酒造株式会社

コップにはいったお酒

清酒一級(180cc) 1パック5本入り



田宮二郎

人気と実力で独走中



豚饅・焼売・焼餃子



大阪・なんば

TEL(641)0551~2

出張販売店

なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
京阪デパート/堂島地下センター/弁天阜頭支店/中之島サン・ストア